

平成 26 年 4 月 2 日（水）14：00～17：15

新任教員 FD 研修「信州大学の教育について」

配布資料リスト

（以下、ポートフォリオのポケットごとにまとめてあります。）

- ◆高等教育研究センターのあらまし/FD のご案内
- ◆FD アンケート用紙（※アンケートにご協力ください）

- ◆信州大学における学生相談のとりくみについて
（資料 No.1-1～1-5，教職員のための学生サポート・ガイドブック（冊子））

- ◆『学位授与の方針』について（資料 No.2-1～2-2）
- ◆信州大学の GPA 制度について（資料 No.3-1～3-3）
- ◆信州大学のシラバスガイドラインについて（資料 No.4-1～4-4,4）

- ◆信州大学の学生について（資料 No.5-1～5-5）

- ◆e-Learning の効用と利用の仕方 –ICT 活用による教育の質保証を目指して–
（資料 No.6）
- ◆信州大学 e-Learning センター（パンフレット）
- ◆新任教員向け eALPS 研修会について（通知）

- ◆国立大学法人信州大学教員業績評価・給与査定制度（全学基準）抜粋
【平成 25 年度参考】（資料 No.7）
- ◆FD 参加証書サンプル（資料 No.8）
- ◆高等教育研究センター NewsLetter
 - ・初年次教育を改めて考える（No.17）
 - ・グローバル人材とは（No.23）
 - ・モチベーションを高める年度計画の立て方とシラバスの書き方（No.25）

○信州大学学生相談センター規程

(平成 23 年 12 月 22 日信州大学規程第 182 号)

改正 平成 25 年 4 月 1 日平成 25 年度規程第 5 号 平成 25 年 11 月 21 日平成 25 年度規程第 30 号

(設置)

第 1 条 信州大学に、信州大学学生相談センター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第 2 条 センターは、各学部、全学教育機構、総合健康安全センターその他関係部局(以下「学部等」という。)と緊密に連携協力し、学生生活を支援するための学生相談に関する業務を行うほか、学生の自殺を防止するために必要な支援を行うことを目的とする。

(業務)

第 3 条 センターは、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 学生相談の実施に関すること。
- (2) 学生相談に係る情報の収集、管理及び分析に関すること。
- (3) 学生相談を受けた事項の解決に向けた提案に関すること。
- (4) 学生の成長発達を促すために必要な啓発活動に関すること。
- (5) 教職員を対象とした学生相談に係る研修の実施に関すること。
- (6) 学生の自殺を防止するために必要な対策の立案に関すること。
- (7) 学生の自殺を防止するための啓発活動に関すること。
- (8) 学生の自殺の発生状況、背景等の調査及び分析に関すること。
- (9) その他学生相談及び学生の自殺防止に関すること。

(組織)

第 4 条 センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) 学生相談センター長(以下「センター長」という。)
- (2) 学生相談センター副センター長(以下「副センター長」という。)
- (3) 学生相談コーディネーター
- (4) 事務職員
- (5) その他必要な職員

(学生相談委員会)

第 5 条 センターの運営に関する事項の審議は、国立大学法人信州大学学生相談委員会において行う。

(センター長)

第 6 条 センター長は、学生担当の副学長をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務を掌理し、所属職員を指揮監督する。

(副センター長)

第 7 条 副センター長は、総合健康安全センター長をもって充てる。

2 副センター長は、センター長の職務を補佐し、センター長に事故があるときは、その職務を代行する。

(学生相談コーディネーター)

第8条 学生相談コーディネーターは、センターと学部等との連絡調整を行う。

(学生相談室)

第9条 センターの業務を円滑に行うため、各学部及び全学教育機構に学生相談室を置く。

2 学生相談室に関し必要な事項は、各学部長及び全学教育機構長が別に定める。

(事務)

第10条 センターの事務は、学務部学生支援課において処理する。

(雑則)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則(平成25年4月1日平成25年度規程第5号)

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則(平成25年11月21日平成25年度規程第30号)

この規程は、平成25年11月21日から施行する。

学生相談委員会

平成26年度新任教員FD研修
(H26.4.2) 資料No.1-2

委員長：学生担当副学長(総括責任者)

副委員長：総合健康安全センター長

委員：学部等の学生相談室長又はこれに準ずる者1人、学生相談コーディネーター、
学務部長、学生支援課長、その他委員会が必要と認める者

審議事項：学生相談(自殺防止対策を含む)に係る施策及び啓発活動に関すること
学生相談センターに関すること

信州大学学生相談センター

対策の実施

本部

センター長

副センター長
(総合健康安全センター長)

学生相談コーディネーター

事務職員

学生委員会

連携

支援

学部等

相談室

室長・教員

保健師

カウンセラー

学務委員会
学生委員会

学務係

チューター教員

学生総合支援センター

キャリアサポートセンター

国際交流センター

支援

進級・情報伝達

全学教育機構

相談室

室長・教員

保健師

カウンセラー

学生委員会

チューター教員

共通教育支援室

総合健康安全センター

医師

カウンセラー

保健師・看護職

人員を含めた支援

学生相談センター

学生相談センターは、学生の様々な困り事について解決に向けて一緒に考えていくセンターです。大学生活を送る中で、学生自身が自己管理する力や問題解決する力を養っていきけるよう、サポートしていきます。学生相談コーディネーターや看護、事務の専門スタッフが皆さんと一緒に考え、学生生活をより充実できるようお手伝いします。

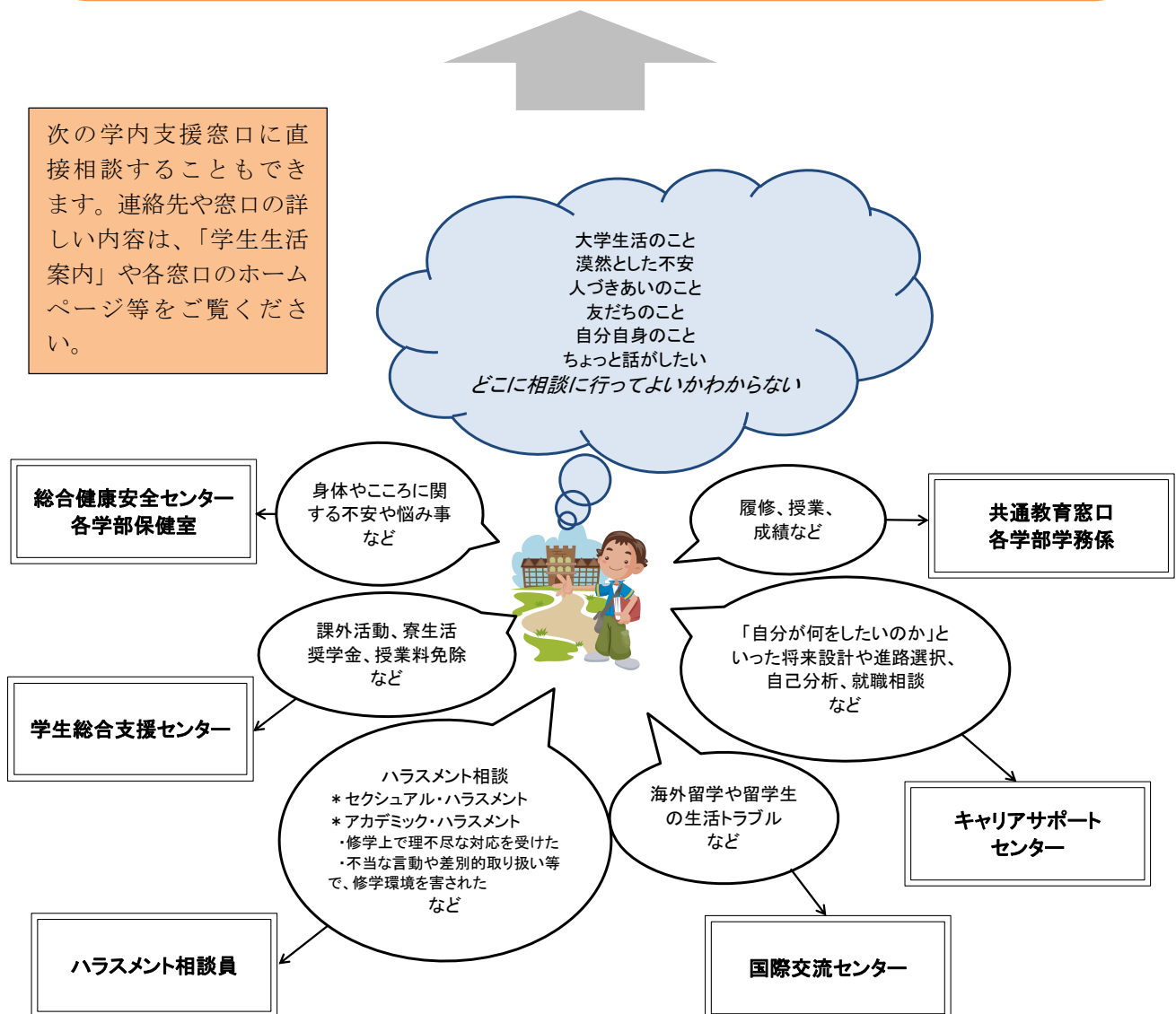
場所 全学教育機構 南校舎1階(松本キャンパス内)

連絡先 ☎0263-37-3165 ✉nandemo@shinshu-u.ac.jp

ホームページ http://www.shinshu-u.ac.jp/campus_life/soudan/



次の学内支援窓口に直接相談することもできます。連絡先や窓口の詳細な内容は、「学生生活案内」や各窓口のホームページ等をご覧ください。



学生相談センターからの刊行物

学生向け「快適なキャンパスライフのために」
保護者向け「学生相談センターより保護者の方へ」

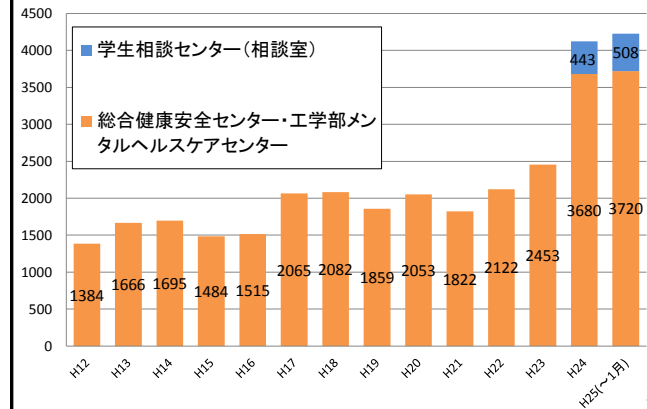
保護者の皆様へのお願い

学生時代は、何かを達成することはもちろん、つまずいたり、悩んだりしながら大きく成長していく時期です。この時期のつまずきや悩みは自分自身を見直し、生き方を決定するために必要なプロセスです。信州大学では、様々な学生支援の窓口をそろえてありますが、学生さんの様子を全て把握できるわけではありません。日々の状況や生活の見守りについては、保護者の皆様のご協力が欠かせません。

学生相談の 利用状況と活動報告

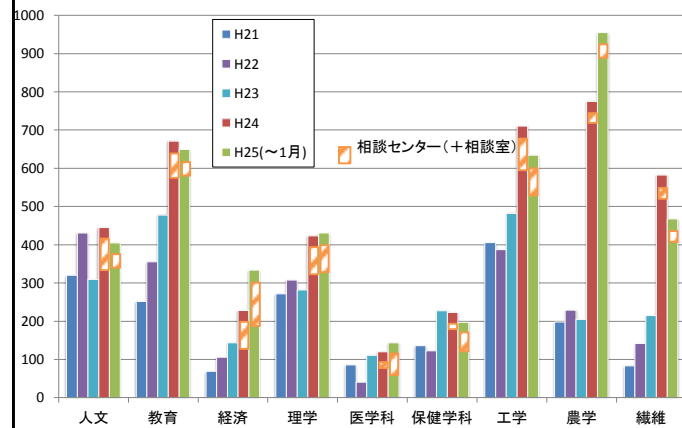
1

学生相談(のべ)件数の推移



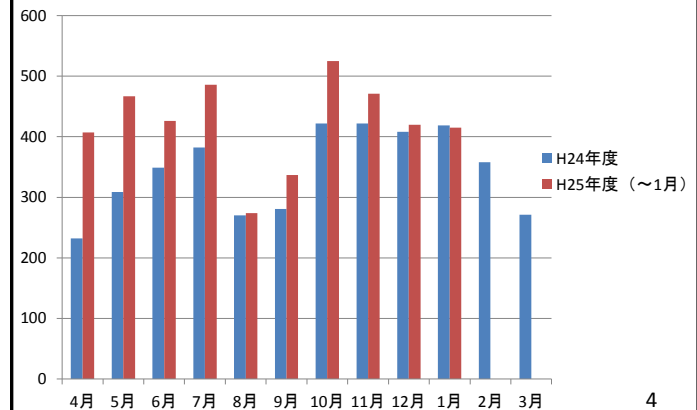
2

学部別学生相談(のべ)件数の推移



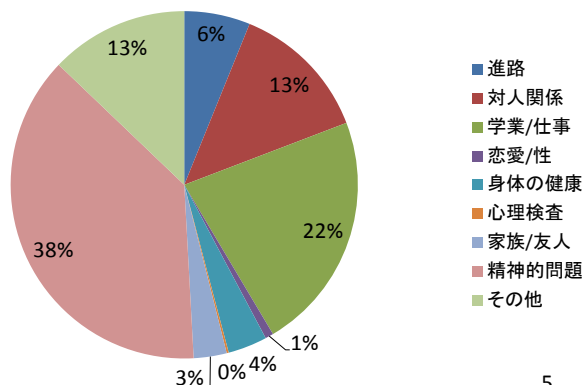
3

月別学生相談(のべ)件数



4

H25年度(～1月)相談内容の内訳(新規)



5

学生相談センター 活動報告と利用状況

7

H25年度活動報告

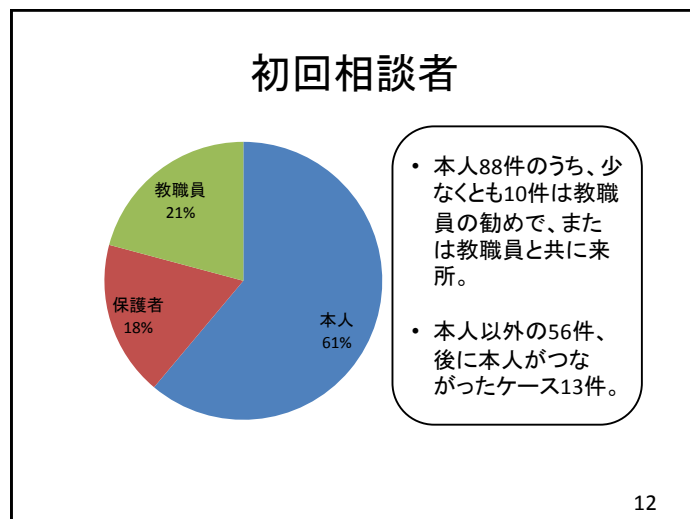
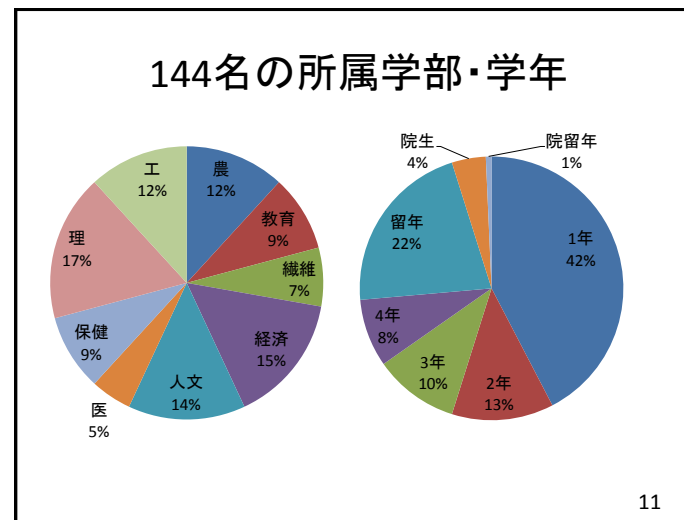
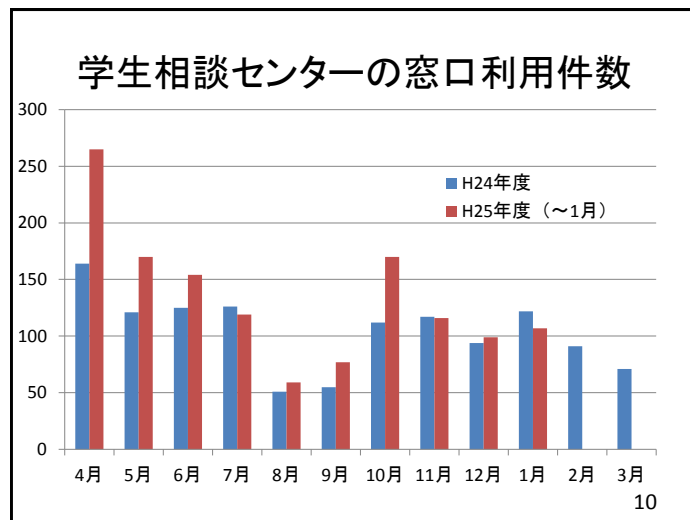
- 学生相談(なんでも相談)
- 学生対応についての教職員の相談
- 先輩学生による新入生なんでも相談コーナー
- ガイダンス、新入生ゼミナール、「健康科学・理論と実践」での心の健康の教育活動
- 学生向けのワークショップ
- 学生相談センター会議の開催
- 死亡事例についての事例検討の実施
- 学生相談件数の集計、学生相談室との共有
- 教職員向けの啓発活動(FD/SD研修)
- ホームページでの情報発信
- 学生向けリーフレット、保護者向けパンフレットの作成
- 学生相談センター年報 第1号の作成

8

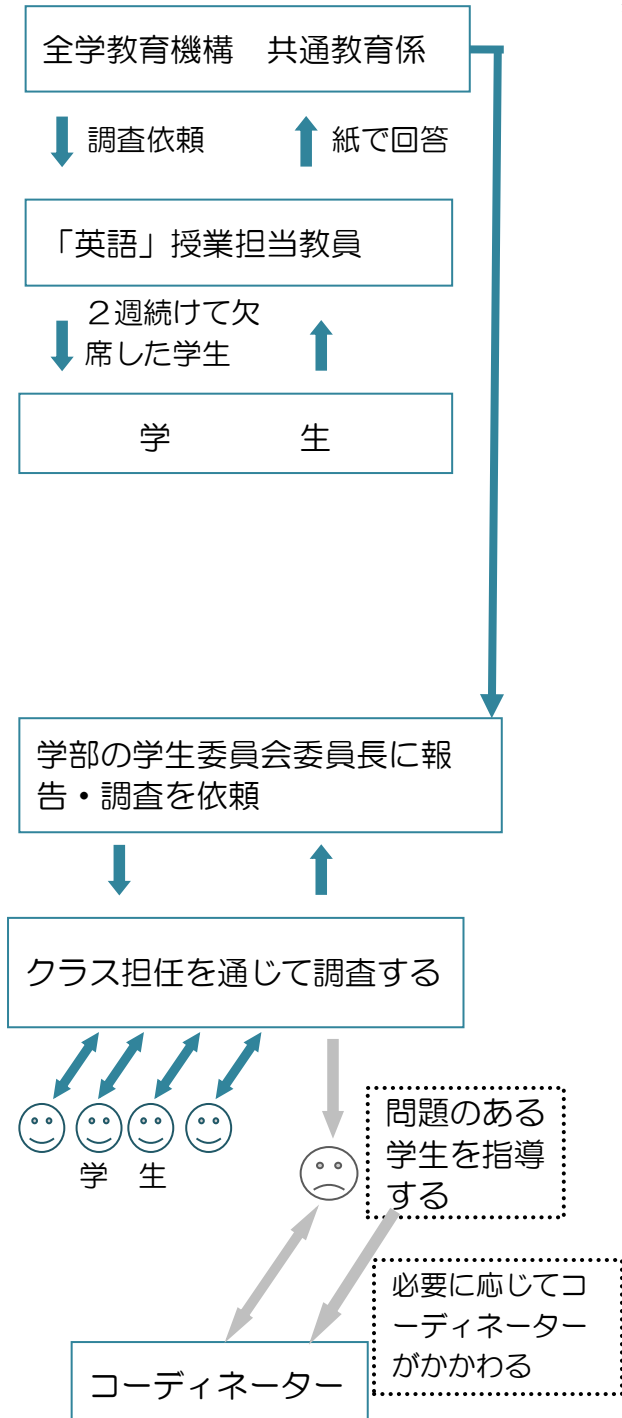
利用状況

- 窓口対応も含め1350件程。
 - 相談対応した学生数は144名。
 - 利用内容は、事務手続き・生活上のトラブル・進路などから精神的問題まで。昨年度と大きく変わらない。
 - 学期始めの利用が非常に増え、学期半ばや学期末の利用は大きく変わらない。
- 昨年度から利用している学生、存在を知っている学生がいること、新入生へのガイダンスなどの影響が考えられる。

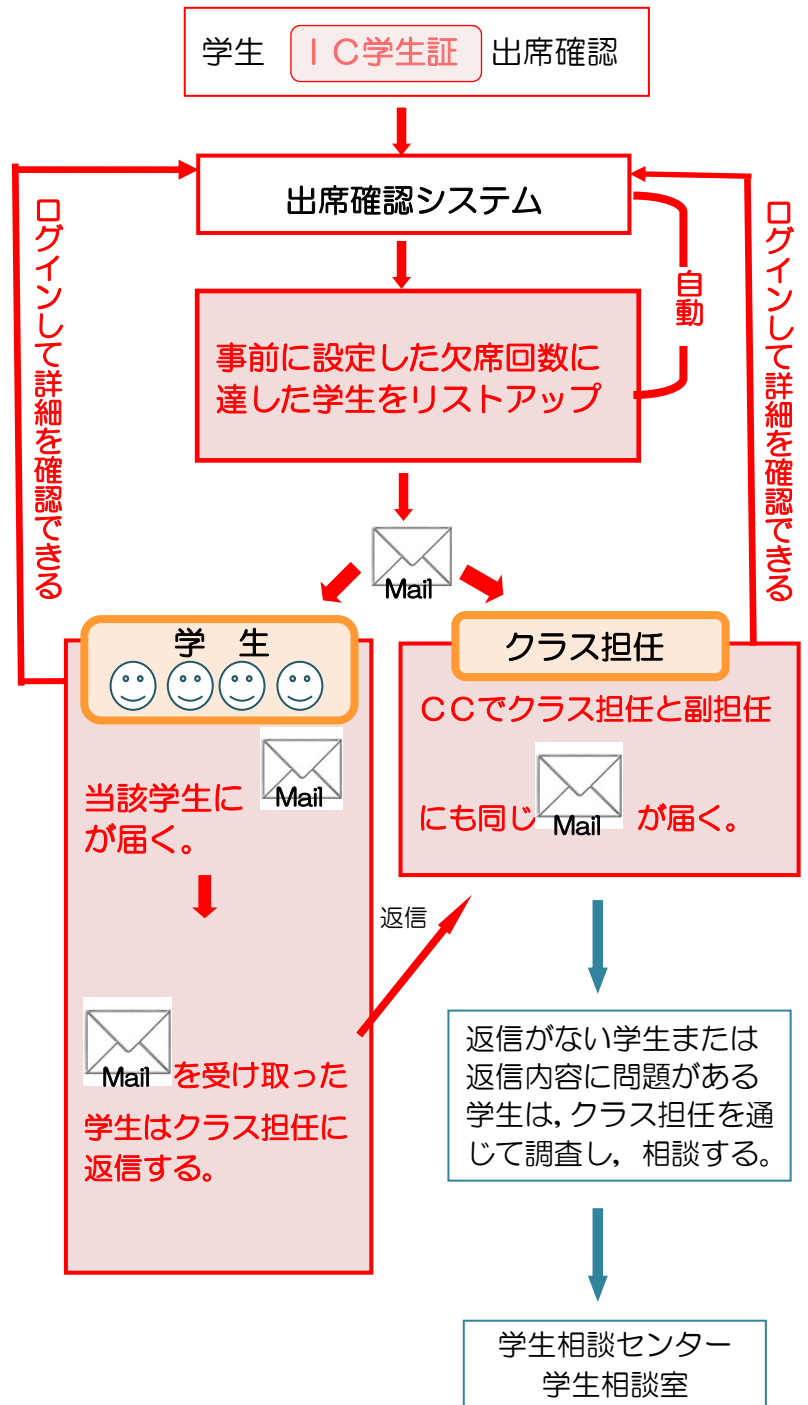
9



現在の1年生の2週連続 欠席調査と学生指導の流れ



I C学生証導入後の欠席調査の流れ



『学位授与の方針』について

高等教育研究センター
加藤 鉦三

信州大学の『学位授与の方針』

1. 内容的には「学士力」
特に個性的であることもない
2. 大学全体のものの他に、学部・学科のものもある

『学位授与の方針』の課題

- △それが何か
- ◎それをどう身に付けさせるか
- ◎身に着けたことをどう可視化するか

大学の2つの課題

中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（2012年8月）

1. 学生に勉強させる
2. 『学位授与の方針』の学習成果を見える化する

現場は**意味**を求めている！

- A: 「上の命令。だからやれ」
多くの大学で、「文科省の指令だ」
- B: 「これをやるとこういういいことがある。だからやれ。」
文科省の指令に対し、その大学での意味を考えている
- C: 「これをやれば、君が問題と感じているあれが解消する。だからやれ。」
文科省の指令に対し、現場の問題を解決する、という意味を考えている

現場は**意味**を求めている！

多くの大学で、「文科省の指令だ」

← 共感のしようがない(かも)

文科省の指令に対し、その大学での意味を考えている

← 共感できる人はいるかもしれない
△やらないとお取りつぶし
○やるとこの大学のここが伸びる

現場は**意味**を求めている！

文科省の指令に対し、現場の問題を解決する、という意味を考えている

← 最も共感を得やすい

問い: なぜ共感を得やすいの？

答え: 「自分のことだから」

・・・極めて当たり前ですが、案外忘れられているかも？

⇒ **個人をベース**に見直しませんか？

私は何をすればいいの？

【2. 学位授与の方針の**学習成果**を可視化してください】

⇒ 自分の授業、という文脈にこの問題を下してきて、**自分のこととして**次を考える
(答申を個々の授業にローカライズ)

- ・私の授業の今そこにある問題
学生**の**動機付けが難しい
学生に**達成感**を持ってもらいたい

7

私は何をすればいいの？

ミッション：学生に達成感を得させる

手段：答申を個々の授業にローカライズ

・『学位授与の方針』の一部を、自分の授業の目標として設定し、**自分の授業のことばで**それを言い直す。

＝「学生が〇〇できるようになる」

実際にできるようになったことを学生が見えるようにする

8

私は何をすればいいの？

「学生が〇〇できるようになる」の例

学位授与の方針：「コミュニケーション能力」 ← **これは測れない**

加藤鉦三の授業：「英語」

⇒ 自分の授業のことばで言い直すと、
「英文でeメールを書ける」← **これは測れる**

可視化：実際に書かせてそれで成績をつける ← 書いたメールがエビデンス

9

私は何をすればいいの？

この図式では、

「学生が〇〇できるようになる」とそのエビデンスを全部集めると

＝可視化された『学位授与の方針』の
学習成果

10

信州大学学位授与の方針

□豊かな人間性

- ・みずからを他者や社会との関わりのなかで捉え、自己啓発に努めることができる【自己認識・自己啓発マインド】
- ・理想や倫理観をもって社会の平和的・持続的発展のために行動できる【社会的行動マインド】

□人類知の継承

- ・人類の知を継承し、それらの成果の上に立って未来について創造的に考えられる【人類知の継承と未来創造マインド】
- ・世界の多様な文化、思想、歴史、芸術に関する幅広い素養がある【多様な文化受容マインド】
- ・科学諸分野の歴史やその成果に関して幅広く理解できる【科学リテラシー】

□社会人としての基礎力

- ・日本語および外国語を用い、的確に読み、書き、聞き、他者に伝えることができる【言語能力】
- ・対話を通じて他者と協力し、目標実現のために方向性を示すことができる【コミュニケーション能力、チームワーク力、リーダーシップ】
- ・多様な情報を適切に取捨選択し、分析・活用できる【情報活用力】
- ・みずから問題を見出し、すじみちを立てて解決できる【問題発見・解決能力】

□科学的・学問的思考

- ・自然や社会の現象を普遍的な尺度や数量的指標を用いて理解できる【普遍的・数量的理解力】
- ・専門学問分野における知識・技能を備え、それらを応用できる【専門知識と応用力】
- ・専門以外の他分野に関する体系的な知識や素養がある【専門外の知識】

□環境マインド

- ・信州の自然・文化的環境への興味と関心をみずから深めることができる【地域環境に関する理解】
- ・自然および人類社会が直面している環境問題を理解することができる【環境基礎力】
- ・地球環境と人類文化との調和・共生のため、積極的に行動することができる【環境実践力】

信州大学のGPA制度

高等教育研究センター
加藤 鉦三

GPAとは？

優とか良とかの成績評価に点数
(grade point)をつけます。

それに単位数をかけ、履修した授業
を全部足していきます。

最後に、履修した授業の数で割った
数値＝**平均値**がGPA(grade point
average)です。

GPAとは？

一つの授業の数値を
 $GP \times \text{取得単位数}$ として、

$$GPA = \frac{\text{全授業の数値}}{\text{総履修登録単位数}}$$

国内他大学の状況は？

やり方

今使っている成績評定区分のままそれ
にGPをあてる

信州大学でそれをする;

SはGP=4.0 Aは3.0

Bは2.0 Cは1.0 Fは0

Cが合格水準, Cが単位認定の下限

国内他大学の状況は？

国内標準のまとめ

- ・今ある成績評定区分をそのまま使う
- ・卒業要件にはしない
- ・退学勧告では使わない

⇒ **特に変わらない**

学生がGPA導入で勉強するようになる, と
は期待できない

北米の大学では？

北米の大学では、「十分ではないが不合格
にはしない」という意味の**D評定**
がCの下にある

	S	A	B	C	D	F
日本	4.0	3.0	2.0	1.0		0
北米		4.0	3.0	2.0	1.0	0

普通の合格の下限はどちらもC

北米では？

この結果、日本のこの方式の大学の卒業生は、北米の大学の出身者と比べると、

同じGPAという名前の制度でありながら、

最初から1.0のハンディキャップを背負うことになります。

北米では？

・累積GPAが2.0を下回った学生は「仮及第」扱いとなり、次(またはそのまた次)の学期で2.0を回復しないと退学となる

・「仮及第」となりそうな場合や、「仮及第」となった時点でアドバイザーの助言を受けることが求められる。アドバイザーは学部教員ではない専門職である。

信州大学のGPA制度

・日本では合格である [C] のGPが1.0
北米では不合格である [D] のGPが1.0
信州大学では [D] を1.0に

50～59点

・北米の [D]: 不合格だが単位を与える
信州大学の [D]: 不合格だから単位を与えないが、1.0のGPを与える
49点以下の不合格はGP=0

信州大学のGPA制度

GPA計算式

$4 \times S$ の取得単位数

+ $3.33 \times A$ の取得単位数

+ $2.67 \times B$ の取得単位数

+ $2 \times C$ の取得単位数

+ $1 \times D$ の単位数

+ $1 \times F$ の単位数

÷ 総履修登録単位数 (Eと不受講も分母に)

信州大学のGPA制度

計算例

科目A(2単位)がC $2.00 \times 2 = 4.00$

科目B(2単位)がA $3.33 \times 2 = 6.66$

科目C(4単位)がF $0 \times 4 = 0$

科目D(2単位)がS $4.00 \times 2 = 8.00$

科目E(2単位)が不受講 $0 \times 2 = 0$

GPA = $(4 + 6.66 + 8) \div (2 + 2 + 4 + 2 + 2)$

= 18.66 ÷ 12

= 1.56

信州大学のGPA制度

①算出したGPAをどう使うのか

例: 進級要件, 退学勧告

②「不受講」、つまり受講撤回をどう扱うのか

例: 1年に1科目だけ認める

③GPA値を修学指導にどう活用するのか

①～③はこの1～2年で議論する

なぜ導入する？

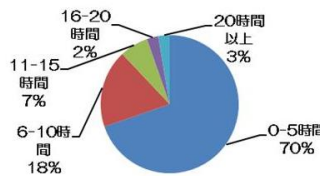


図2 学生の学習時間調査、2012年度、1年生1947人回答

「高等教育センターニュース」 No.20より
信大1年生で、勉強時間が週0～5時間が7割

信州大学の特徴

「学生が勉強するようになる」を目標としてGPAを導入する

GPA制度自体は、勉強させるツールとしては弱い

GPAは、①勉強させるための鞭として、
②「成績」というものを真剣に考えさせるためのきっかけとして、使う

信州大学の特徴

①勉強させるための鞭として

- ・学部の判断により、学部の実情に合わせて、進級判定や卒業判定に準ずるものとして使う

信州大学の特徴

②「成績」というものを真剣に考えさせるためのきっかけとして使う

GPA導入で、学生は成績により敏感になることが知られている
それに加えて

信州大学の特徴

初年次教育で、「成績は空から降ってくるものではなく、自分で稼ぎ出すもの」という意識を叩き込む



課題を出さなければ落ちる、レポートがちゃんとしていなければ落ちる、等々

成績のつけ方でコンセンサスを



努力するようになれば、学生は成績が上が
り、教員にもやりがい

8 GPA 制度について

信州大学では、学生が適切に履修計画をたて、自主的、意欲的に学習することを促すとともに、適切な修学指導に資することを目的として、平成26年度学部入学生から、「GPA（グレード・ポイント・アベレージ）制度」を導入します。

このGPAは、世界の大学で広く用いられている学生の成績評価方法です。会社に就職する、大学院に進学する、海外の大学に留学するような場合に応募先での採否の判断となるものです。

教員は、GPAを活用することにより成績不振学生を早期に発見し、適切な指導に繋げることができます。

8-1. GPAについて

「GPA」とは、秀、優、良、可及び不可の5種の評語をもって表した成績の単位数に、それぞれの科目のGP（Grade Point）を掛けて合計したものを、履修登録を行った単位数の合計で割って計算した、GPの平均値（Average）です。評語と評点とGPの関係を以下に示します。

評語	評点	GP
秀（S）	90-100	4
優（A）	80-89	3.33
良（B）	70-79	2.67
可（C）	60-69	2
不可（D）	50-59	1
不可（F）	0-49	0

※各科目の単位修得には、「可」以上が必要です。

※不受講（E）の成績のついた科目は、GPが付与されません。

8-2. GPAの計算式について

$$GPA = \frac{[\text{履修登録した科目の単位数} \times \text{当該科目のGP}] \text{の合計}}{\text{履修登録した科目の単位数（不可（D・F）を含む，不受講（E）は除く）合計}}$$

【GPAの計算例】

授業の成績	GPの計算
科目A（2単位）でB（良）を取った	$2.67 \times 2 = 5.34$
科目B（4単位）でA（優）を取った	$3.33 \times 4 = 13.32$
科目C（2単位）でD（不可）を取った	$1.00 \times 2 = 2.00$
科目D（4単位）でS（秀）を取った	$4.00 \times 4 = 16.00$
科目E（2単位）でF（不可）を取った	$0 \times 2 = 0$

$$\begin{aligned} GPA &= (5.34 + 13.32 + 2.00 + 16.00 + 0) \div (2 + 4 + 2 + 4 + 2) \\ &= 36.66 \div 14 \\ &= 2.62 \end{aligned}$$

※小数第3位を四捨五入した数値を小数第2位まで表示し、その値をGPA値とします。

1. 履修登録した科目のうち、GPAの計算式に入らない科目があります。

- ① 成績を「合格」・「不合格」で評価する科目
- ② 他大学等で単位修得し、本学が「認定」とした科目
- ③ 学部で指定する科目（所属学部毎にお知らせします。）

※不受講（E）は、GPA計算式からは除外されます。

2. 「不可（D・F）」の科目を再履修して合格（単位修得）した場合、再履修前の「不可（D・F）」の成績はGPAの計算式に入りません。

- ・同じ科目名の授業でなければ「再履修」にはなりません。
- ・「不可（D・F）」と成績評価された科目を、再び履修登録して合格した場合は、「可」以上（GP = 2～4）の成績がGPAの計算式に入り、「不可」（GP = 0, 1）の成績は合格した学期以降のGPA計算式から除外されます。なお、再履修して再び「不可（D・F）」と成績評価された場合も、再履修後のGP値に置き換わります。
- ・授業は来年度も同じものが開講されるとは限りませんので、再履修ができない場合もあります。「履修登録した科目は必ず合格する」という覚悟が必要です。

8-3. GPAの通知について

- ・学期毎に、キャンパス情報システム（Web）から、成績評価と、科目ごとのGP値及び学期毎・在学中の通算のGPA値が確認できます。
- ・学期毎及び在学中の通算GPA値を確認することで、学習成果の指標としましょう。例えば、1年次前期のGPA値が2.0以下であった場合、1年次後期や2年次以降の学習に支障をきたす可能性が高いので、1年次前期の内容を復習すると同時に後期の勉強の準備をしっかりとしましょう。
- ・なお、GPA値は担任との面談でも利用されます。

【キャンパス情報システム（Web）修得単位確認画面】

修得単位確認					
学籍番号		14L9999X		氏名	信州 花子
				所属	人文学部
科目区分	修得単位	履修単位	合計単位	GPA計算 単位数	
共通科目	36	2	38	36	
教養科目	22	0	22	22	
環境科学群	4	0	4	4	
人文学群	6	0	6	6	
社会科学群	6	0	6	6	
自然科学群	4	0	4	4	
芸術・スポーツ群	2	0	2	2	
基礎科目	14	2	16	14	
外国語科目	10	2	12	10	
英語	6	2	8	6	
中国語	4	0	4	4	
健康科学科目	2	0	2	2	
健康科学・理論と実践	2	0	2	2	
新入生ゼミナール	2	0	2	2	
専門科目	60	20	80	50	
必修科目	4	0	4	4	
選択科目(A)	16	0	16	22	
選択必修(A)	8	0	8	8	
選択科目(B)	22	8	30	24	
選択必修(B)	10	2	12	10	
自由科目	18	12	30	18	
=== 合計 ===	96	22	118	86	
教職に関する科目	4	0	4	4	
年度	前期		後期・通年		
	GPA	修得単位数	GPA	修得単位数	
2014	3.45	22	3.17	26	
2015	3.31	18	2.68	24	
2016	2.50	10			
GPA	修得単位数	GPA計算単位数			
3.15	96	86			

【キャンパス情報システム（Web）成績確認画面】

成績確認

学籍番号 14L9999X 氏名 信州 花子 所属 人文学部

[印刷]

[修得単位確認]

[学位授与の方針マップ]

履修年度	すべて	▼ 年度
講義期間	すべて	▼
科目区分	すべて	▼
授業名	(授業名の一部で検索します)	
検 索		

GPA : 3.15

コード	授業名	教員名	年度	単位	評価	G P
【共通科目】						
【教養科目】						
ー環境科学群ー						
00003	NHKビデオで学ぶ地球環境の歴史	森清 壽郎	2014	2	優	3.33
00119	環境とは何か？ー環境倫理学入門ー	関塚 正嗣	2014	2	優	3.33
ー人文学科学群ー						
01006	ブッダと大乘仏教の世界	鎌山 真也	2014	2	優	3.33
01007	哲学と政治Ⅱ：現代を見つめる	小山 花子	2014	2	良	2.67
01108	漱石「こころ」を読む	橋浦 史一	2014	2	良	2.67
ー社会科学群ー						
01201	民族学入門	佐々木 明	2014	2	可	2
01209	考古学入門	佐々木 明	2014	2	優	3.33
02409	経済指標の読み方	眞壁 昭夫	2014	2	良	2.67
ー自然科学群ー						
03001	臨床心理学の基礎を学ぶ	清水 健司	2015	2	可	2
03008	他者を知り、自分を知る心理学	長谷川 孝治	2014	2	優	3.33
ー芸術・スポーツ群ー						
04215	弓道	杉田 博	2014	2	優	3.33
【基礎科目】						
ー外国語科目ー						
／英語／						
30002	FAEⅠ(中級)	山口 和彦	2014	1	良	2.67
30102	FAEⅡ(中級)	山口 和彦	2014	1	良	2.67
30301	コミュニケーション・イングリッシュⅡ(中級)	RICHARD M. N. ROBINSON	2014	1	良	2.67
30600	リーディング・プラスⅠ	ANDREA ORLANDINI	2014	1	良	2.67
31000	アカデミック・イングリッシュⅠ(上級)	RUZICKA DAVID	2015	2	可	2
31100	アカデミック・イングリッシュⅡ(上級)	RUZICKA DAVID	2015	2	不受講	-
31100	アカデミック・イングリッシュⅡ(上級)	RUZICKA DAVID	2016	2	修得中	-
／中国語／						
34020	中国語初級(文法)Ⅰ	百瀬 美津江	2014	1	優	3.33
34030	中国語初級(文法)Ⅱ	百瀬 美津江	2014	1	良	2.67
34041	中国語初級(読解・会話)Ⅰ	伊藤 加奈子	2014	1	良	2.67
34051	中国語初級(読解・会話)Ⅱ	伊藤 加奈子	2014	1	良	2.67
ー健康科学科目ー						
／健康科学・理論と実践／						
40016	健康科学・理論と実践	川 茂幸	2014	2	優	3.33
ー新入生ゼミナールー						
61001	新入生ゼミナール	長谷川 孝治	2014	2	優	3.33
【専門科目】						
【必修科目】						
LH001	人間情報学概論Ⅰ	篠原 成彦	2014	2	良	2.67
LH002	人間情報学概論Ⅱ	清水 健司	2014	2	良	2.67
【選択科目(A)】						
L0220100	社会学概論Ⅰ	村山 研一	2016	2	不可	1

L0310100	心理学概論Ⅰ	今井 卓	2016	2	不可	1
L0410100	日本史概論Ⅰ	佐藤 全敏	2016	2	優	3.33
L0420100	世界史概論Ⅰ/Ⅱ	久保 亨	2016	2	不可	1
L0430100	世界史概論Ⅰ/Ⅱ	柴野 均	2016	2	可	2
LH026	心理学概論Ⅱ	高瀬 弘樹	2014	2	可	2
LH027	社会心理学概論Ⅰ	内藤 恭雄	2014	2	良	2.67
～選択必修(A)～						
LH003	西洋思想概論Ⅰ	篠原 成彦	2014	2	可	2
LH004	西洋思想概論Ⅱ	三谷 尚澄	2014	2	可	2
LH005	東洋思想概論Ⅰ	鎌山 真也	2015	2	秀	4
LH006	東洋思想概論Ⅱ	早坂 俊廣	2015	2	可	2
【選択科目(B)】						
L0110900	哲学特論Ⅰ	篠原 成彦	2016	2	標準	-
L0111600	比較哲学特論Ⅳ	鎌山 真也	2016	2	標準	-
L0112100	東洋思想特論Ⅰ	早坂 俊廣	2016	2	優	3.33
L0112200	東洋思想特論Ⅱ	早坂 俊廣	2016	2	不受講	-
L0112800	倫理思想論Ⅰ/Ⅱ	三谷 尚澄	2016	2	標準	-
LH019	論理学Ⅰ	篠原 成彦	2015	2	良	2.67
LH020	論理学Ⅱ	篠原 成彦	2015	2	優	3.33
LH022	哲学特論Ⅱ	篠原 成彦	2015	2	不可	-
LH024	比較哲学特論Ⅱ	小山 花子	2015	2	優	3.33
LH025	比較哲学特論Ⅲ	鎌山 真也	2015	2	良	2.67
LH026	東洋思想特論Ⅱ	早坂 俊廣	2015	2	可	2
LH028	東洋思想特論Ⅳ	早坂 俊廣	2015	2	不可	1
～選択必修(B)～						
L0113500	哲学演習Ⅰ/Ⅲ/Ⅴ	篠原 成彦	2016	2	可	2
L0115100	西洋思想演習Ⅱ/Ⅳ/Ⅵ	篠原 成彦	2016	2	標準	-
LH007	哲学・思想論基礎演習Ⅰ	鎌山 真也	2015	2	優	3.33
LH008	哲学・思想論基礎演習Ⅱ	鎌山 真也	2015	2	良	2.67
LH011	西洋思想演習Ⅴ	三谷 尚澄	2015	2	不受講	-
LH017	東洋哲学講読Ⅴ	鎌山 真也	2015	2	優	3.33
LH018	東洋哲学講読Ⅵ	鎌山 真也	2015	2	良	2.67
【自由科目】						
L0311200	心理学特論Ⅱ	高瀬 弘樹	2016	2	優	3.33
L0321400	グループ・ダイナミクスⅠ	岡本 卓也	2016	2	標準	-
L0410300	地域文化史特論Ⅰ/Ⅱ	佐藤 全敏	2016	2	標準	-
L0430500	西洋史特論Ⅲ/Ⅳ	柴野 均	2016	2	標準	-
L0430900	西洋史特論Ⅵ/XⅡ	柴野 均	2016	2	標準	-
L0431000	西洋史特論Ⅶ/XⅡ	柴野 均	2016	2	標準	-
L0920900	朝鮮文化事情Ⅱ	延 鐘漢	2016	2	標準	-
LC003	日本文学概論Ⅰ	松本 和也	2015	2	可	2
LC004	日本文学概論Ⅱ	松本 和也	2015	2	優	3.33
LH115	歴史学特論Ⅰ	佐々木 明	2015	2	優	3.33
LH116	歴史学特論Ⅱ	佐々木 明	2015	2	秀	4
LH117	歴史学特論Ⅲ	佐々木 明	2015	2	秀	4
LH118	歴史学特論Ⅳ	佐々木 明	2015	2	優	3.33
LH119	歴史学特論Ⅴ	佐々木 明	2015	2	良	2.67
LH120	歴史学特論Ⅵ	佐々木 明	2015	2	優	3.33
【教職に関する科目】						
Q2001	教職論	坂本 保富	2014	2	良	2.67
Q9000	教育相談の理論と実践	庄司 和史	2014	2	良	2.67

· 成績評定基準

秀：100-90点

優： 89-80点

良：79-70点

[履修・成績メニューに戻る](#)

GPAを検討する上での本学における用語の定義

○「再履修」

履修の結果、不合格となった科目を、次のセメスター或いは次年度に同じ科目で、改めて（再度）履修することをいう。

必修科目は、必ず履修しなければならないが、選択科目については、学生意思に任せられている。

例：本学の教養科目の任意の「科学群」内で、落とした科目とは別の科目を履修した場合は再履修とは言わない。（但し、履修しなければならない単位数は合格することで満たすことができる。）

○「再試験」

全学教育機構で定められた科目に限り、期末試験の結果「不合格」になった科目を、同じセメスター内で、再度試験を行い、その試験で合格した場合は、単位を与える制度。（隔地学部と医学部医学科を対象に行っていたが、平成23年度末に廃止されている。）

○「セメスター」

1 学年複数学期制の授業形態。本学では、個々の学期が15週程度で、前学期・後学期の2学期制。

○「上書き」

再履修した科目の成績が最終的なGPAの成績となり、以前に履修した同じ科目の成績が置き換わる。（「不可（D・F）」の科目を再履修して合格した場合、過去の「不可（D・F）」の成績はGPAの計算式に入らない）

○「読み替え」

カリキュラム改訂をした年に、本来ならば旧カリキュラムの科目で単位を落とした学生のために、旧カリキュラムの科目は、履修する学生がいなくなるまで、開講し続けなければならない。これを大学の都合で、新カリキュラムで開講する指定した科目の履修・合格で、旧カリキュラム科目を履修したとして読み替えること。

○「成績通知書」

「不可」・「不受講」を含んだ成績の一覧表。期末に学生に渡すもの。

○「成績証明書」

合格した科目のみ表示した成績の一覧表で、学長の証明入り。企業等に提出する時に使う。

=====

GPAを検討する上で習熟度別クラスで履修する「英語」の成績の付け方（全学教育機構）

上級クラス（全体の4割程度の学生が履修） 秀S・優Aの割合が4割を標準とする。

中級クラス（全体の6割程度の学生が履修） 秀S・優Aの割合が3割を標準とする。

〔平成24年度までの取扱い／平成25年度からは条件なし〕

資料No.4-1 新シラバスガイドライン

平成25年11月14日

各学部（機構）長 殿

理事（教務）

赤 羽 貞 幸

シラバスガイドラインの改訂について（依頼）

平成25年10月4日開催の第6回教務委員会において、別紙1のとおり、授業の目標を大学全体ならびに学部学科の『学位授与の方針』に直結する形で、全学的なシラバスガイドラインの改訂が承認されました。続いて、11月1日開催の第7回教務委員会において、別紙2のとおりサンプルのシラバスが提示されました。

つきましては、平成26年度シラバスから、改訂シラバスガイドラインに沿った形でのシラバスの作成をお願いいたします。

なお、完成しましたシラバスについては、これまでの各部局での点検に加え、全授業科目に大学全体ならびに学部学科の『学位授与の方針』の項目が入っているか、また各部局開講授業全体を見て、各部局で制定した『学位授与の方針』の全てが選択されているかについて点検していただきますようお願いいたします。

また、学務情報システムやキャンパス情報システムについては、改訂されたシラバスガイドラインに基づいた様式に、11月17日までに改修する予定です。

担当
学務部学務課教務グループ 奥原・細川
TEL:0263-37-2427(内線811-2416)
E-mail campus-eie@shinshu-u.ac.jp

資料No.4-2 新シラバスガイドライン

信州大学シラバスガイドラインの改訂

このガイドラインは、信州大学で開講されるすべての授業のシラバスが備えるべき必須条件である。ただし、下記に記載する事柄をシラバスにおいて具体的にどのように表記するかについては、各学部学科の専門教育課程及び共通教育課程（以下、各学部）によって異なってくるため、より具体的な「シラバス作成の手引き」のようなものは、必要に応じて各学部において作成するものとする。

大学並びに各学部・学科等の定める『学位授与の方針』は、それぞれの教育課程の卒業生が卒業時に確実に身に付けていることが求められる能力・知識のリストであり、個々の授業は、学生が、大学並びに各学部・学科の『学位授与の方針』の能力・知識を身に付けるために配置されている。したがって、個々の授業が『学位授与の方針』のどの部分をどういう形で担っているのかをシラバスで明らかにするものとする。

『学位授与の方針』で定める能力・知識は、授業等を通して、学生が自分の努力によって手に入れるべきものである。シラバスでは、課題や小試験の内容と回数等、当該授業が担う『学位授与の方針』に至るまでに学生がしなければならないことを、学生が明確に理解できるように記述するものとする。その上で、それらが成績評価においてどのように扱われるのか、配点等を明らかにするものとする。

以上の考え方に立ち、以下の6項目を信州大学の授業のシラバスの必須記述項目とする。なお、シラバス作成に先立つ授業設計に当たっては、当該授業のカリキュラムの中での位置づけ・他の授業との関連を意識するものとする。

①授業の基本的な情報

授業名、担当者氏名、教室、開講日時（何曜日何時限目）、単位数、教科書、参考書。
その他、各学部の必要に応じて記載する。

②授業が担う大学並びに学部・学科等の『学位授与の方針』の項目と、授業の達成目標

授業の達成目標は、この授業が担う『学位授与の方針』の項目をこの授業の言葉で言い換えたものとし、（知識面、スキル面、態度面の組み合わせで、またはいずれかの面で）「〇〇ができるようになる」という形を標準とする。

③成績評価の方法

受講者が②の達成目標に到達するために通っていく過程（課題や小試験等）と、到達したことを示すエビデンス（最終レポートや期末試験等）のそれぞれの内容と配点を記述する。

④授業計画

15回の授業のおよその内容と順番、課される課題や小試験等のスケジュールを記述する。課題については、提出締切も示す。評価のための最終試験を行う場合は、15回の授業とは別に行う。

⑤履修上の注意

当該の授業での教科書や参考書の利用方法、注意事項など

⑥オフィスアワー及び授業担当者の連絡先

- ・黄色マーカー：これまでもあった項目
- ・赤色マーカー：今回のガイドライン改訂に伴い新設する項目
(授業で得られる『学位授与の方針』の項目については、全学教育機構・医学部保健学科ではこれまでもありました)
- ・青枠：記入例

資料No.4-3 新シラバスガイドライン

時間割コード	XXXXXY										
授業科目	授業題目	テスト用宇宙船地球号				担当教員	教員テスト				
	英文授業名	test									
	単位数	2	講義期間	通年	曜日・時限	月曜・1時限	対象学生	test			
	講義室			授業形態			備考				
宇宙船地球号	(1)授業のねらい 【授業で得られる『学位授与の方針』の項目】「(1) 授業のねらい」の中へ ※全学教育機構・医学部保健学科以外は新設 ・全学教育機構・医学部保健学科は、下にあった【授業で得られる「学位授与の方針」要素／◎：全学共通】を「(1) 授業のねらい」にもってくる。 ・大学の『学位授与の方針』または学部・学科等の『学位授与の方針』から少なくとも一つを選択してください。(大学、学部・学科のDPをシステムに表示させ、そこから選択する形をとる。) 例：信州の自然・文化的環境への興味と関心をみずから深めることができる【地域環境に関する理解】 【授業の達成目標】※新設 ・上で選んだ『学位授与の方針』の項目・要素を、この授業の言葉で言い換えてください。「○○ができるようになる」という趣旨の言い方を標準とします。 例：信州の環境を理解しそこから今後の自分の人生の強みを引き出すことができる。(その他、DPに対応した記入例は別紙を参照してください。) 【授業のねらい】 ・従来の「(1) 授業のねらい」に書いたことをここにお書きください。 例：信州の強みを体験することでそれを再発見し、今後の人生を生きて行く中で活かすことができる自分の力とする。フィールドワークを取り入れ、実際に外出いて信州を体験する。 (2)授業の概要 ※従来どおりご記入ください。 (3)授業計画 ※基本的には従来どおりご記入ください。 (詳細は改訂シラバスガイドラインを参照) 例： 第1回(4/10) 学びのはじまりー自己紹介、名前、シラバス、履修登録相談 第2回(4/17) 一学期の記録をとろうーポートフォリオをつくる 第3回(4/24) 話して聞いて合意しようー話し方と聞き方のマナーを学ぶ 第4回(5/1) 本格的に学びを開始しよう(1)ー図書館の支援を知る【小レポート1課題提示】 ＜注意＞5月8日は月曜日の授業時間割＞ 第5回(5/15) 本格的に学びを開始しよう(2)ー大学生の学習法【5/19小レポート1提出】 第6回(5/22) 生活を見直し、大学をきちんと利用しようー体調管理・タイムマネジ						メント・ストレスマネジメントー助けてくれる人・場所のいろいろ 第7回(5/29) ポートフォリオの確認とグループ課題開始【書き直し提出】【グループ課題提示】 第8回(6/5) 自分と違う人を受け入れようーいろんな人との関係を維持するには【小レポート2課題提示】 第9回(6/12) グループ内の友達を知ろう 第10回(6/19) 信州の防災【6/23小レポート2提出】 第11回(6/26) グループ発表の準備【ポートフォリオ課題提示】 第12回(7/3) 信州大学を知ろうー歴史と特徴【書き直し提出】 第13回(7/10) グループ発表の準備 第14回(7/17) グループ課題のプレゼンテーション 第15回(7/24) 学びのふりかえりと授業アンケート【ポートフォリオ提出】 7/31 ポートフォリオ返却、閉講 (4)成績評価の方法 ・「小テストで○％、期末テストで○％」というような点の配分だけでなく、「何で何を測る」という形で、できるだけ授業到達目標と評価の対応関係が分かるように書いてください。 例：成績評価の考え方は次の通りである。 ・○○学の基本的理解に導く毎回の授業内容の理解を測る小テストで○％ ・「○○ができるようになる」ったかどうかを測る期末試験で○％ (その他、DPに対応した記入例は別紙を参照してください。) (5)履修上の注意 ※従来どおりご記入ください。 (6)質問、相談への対応 ※従来どおりご記入ください。				
	【授業で得られる「学位授与の方針」要素／◎：全学共通】 <table border="1"> <tr> <td>◎自己認識・自己啓発マインド</td><td>(1) 授業のねらい【授業で得られる『学位授与の方針』の項目】へ</td></tr> <tr> <td>◎社会的行動マインド</td><td>(1) 授業のねらい【授業で得られる『学位授与の方針』の項目】へ</td></tr> </table> 【教科書】 ※従来どおりご記入ください。 【参考書】 ※従来どおりご記入ください。						◎自己認識・自己啓発マインド	(1) 授業のねらい【授業で得られる『学位授与の方針』の項目】へ	◎社会的行動マインド	(1) 授業のねらい【授業で得られる『学位授与の方針』の項目】へ	
◎自己認識・自己啓発マインド	(1) 授業のねらい【授業で得られる『学位授与の方針』の項目】へ										
◎社会的行動マインド	(1) 授業のねらい【授業で得られる『学位授与の方針』の項目】へ										

②「言い換え」の例と、その「言い換え」を到達目標にした場合の③「成績評価の方法」の例

ご注意： 新しいことを盛り込む、というよりは、今やっていることを言語化する、という方向でお考えください。

DP 人類の知を継承し、それらの成果の上に立って未来について創造的に考えられる【人類知の継承と未来創造マインド】

言い換えの例 「金融市場の発達について家族に説明できるようになる」

成績評価の方法の例 説明の内容とどう説明したかについてのレポート課題

DP 世界の多様な文化、思想、歴史、芸術に関する幅広い素養がある【多様な文化受容マインド】

言い換えの例 「中国の文化と日本の文化の深層での違いから表面的な違いが説明できるようになる」

成績評価の方法の例 そのような内容のレポート課題もしくは筆記試験

DP 科学諸分野の歴史やその成果に関して幅広く理解できる【科学リテラシー】

言い換えの例 「青年心理学の基本的考え方について家族に説明できるようになる」

成績評価の方法の例 説明の内容とどう説明したかについてのレポート課題

DP 自然や社会の現象を普遍的な尺度や数量的指標を用いて理解できる【普遍的・数量的理解力】

言い換えの例 「日常生活の中で、授業で扱う尺度や指標で測ることができるものと測ることができないものとの区別をつけることができる」

成績評価の方法の例 そのような内容のレポート課題もしくは筆記試験

DP 専門学問分野における知識・技能を備え、それらを応用できる【専門知識と応用力】
(略)

DP 専門以外の他分野に関する体系的な知識や素養がある【専門外の知識】
(略)

DP みずからを他者や社会との関わりの中かで捉え、自己啓発に努めることができる【自己認識・自己啓発マインド】

言い換えの例 「『なりたい自分』を思い描き、そこに至るための努力と成果の記録を自分でつけることができるようになる」

成績評価の方法の例 ポートフォリオ評価

DP 理想や倫理観をもって社会の平和的・持続的発展のために行動できる【社会的行動マインド】

言い換えの例 「社会のために行動できる自分に気付くためにボランティア活動を体験する」

成績評価の方法の例 どういう活動をしそこから自分が何を得たかを説明するレポート課題

DP 日本語および外国語を用い、的確に読み、書き、聞き、他者に伝えることができる【言語能力】

言い換えの例1 「アカデミックなレポートの書き方を知っている」

成績評価の方法の例1 レポート課題

言い換えの例2 「時間はかかるが、英文 e メールを理解し、短い英文 e メールを書くことができるようになる」

成績評価の方法の例2 筆記試験

DP 対話を通じて他者と協力し、目標実現のために方向性を示すことができる【コミュニケーション能力、チームワーク力、リーダーシップ】

言い換えの例1 「グループの目的をグループワークで設定し、その目的に至るまでの方法をグループワークで決めることができるようになる」

成績評価の方法の例1 グループの活動記録

言い換えの例2 「学内でするボランティア活動を学生が自分たちで企画し自分たちで実行する」

成績評価の方法の例2 企画書とグループの活動記録

DP 多様な情報を適切に取捨選択し、分析・活用できる【情報活用力】

言い換えの例1 「文献から必要な情報を読み取ることができるようになる」

成績評価の方法の例1 筆記試験

言い換えの例2 「自分の論文の論理構成に必要な情報を先行研究から読み取る。（「卒業論文」の審査項目の一つとして）」

成績評価の方法の例2 （卒業論文）

DP みずから問題を見出し、すじみちを立てて解決できる【問題発見・解決能力】

言い換えの例1 「自分の身の回りの小さな課題に授業で学んだ考え方を応用し、自分の解決を設計する」

成績評価の方法の例1 課題の内容とどう解決するかを説明するレポート課題

言い換えの例2 「学士課程での教育を受けた者に期待されるレベルでの問題発見・解決能力があることを卒業論文で証明して見せる。 (「卒業論文」の審査項目の一つとして)」

成績評価の方法の例2 (卒業論文)

DP 信州の自然・文化的環境への興味と関心をみずから深めることができる【地域環境に関する理解】

言い換えの例 「信州の農業を自然環境から理解し、家族にそれについて説明することができるようになる」

成績評価の方法の例 説明の内容とどう説明したかについてのレポート課題

DP 自然及び人類社会が直面している環境問題を理解することができる【環境基礎力】

言い換えの例 「地球環境の仕組みについて、社会人として踏まえているべき初歩的な内容を家族に説明することができるようになる」

成績評価の方法の例 説明の内容とどう説明したかについてのレポート課題

DP 地球環境と人類文化との調和・共生のため、積極的に行動することができる【環境実践力】

(略)

DPと成果の見える シラバスの考え方

4/2/2014

加藤善子・加藤鉦三
(高等教育研究センター)

1

このFDのねらい

- シラバスガイドライン改定に伴う, シラバスの書き方についての重要ポイントを理解する
- DPを各授業のレベルに落として表現する
- 各授業の到達目標を, 数字で測る方法を考える
- 到達度(=成績)を, 学生の努力(=授業外学習)の結果として捉える視点を得る

2

改訂シラバスガイドラインのねらい **その1**

②授業が担う大学並びに学部・学科等の『学位授与の方針』の項目と、授業の達成目標

授業の達成目標は、この授業が担う『**学位授与の方針**』の項目をこの授業の言葉で言い換えたものとし、(知識面, スキル面, 態度面の組み合わせで、またはいずれかの面で)「**〇〇ができるようになる**」という形を標準とする。

3

改訂シラバスガイドラインのねらい **その1**

「**授業の言葉で言い換える**」の例:

【人類知の継承と未来創造マインド】

⇒ 「金融市場の発達について家族に説明できるようになる」

【多様な文化受容マインド】

⇒ 「中国の文化と日本の文化の深層での違いから表面的な違いが説明できるようになる」

4

改訂シラバスガイドラインのねらい **その1**

「授業の言葉で言い換える」のねらい

DPのままでは

【人類知の継承と未来創造マインド】

× 抽象的なお題目

× 身についたかどうか判定できない

5

改訂シラバスガイドラインのねらい **その1**

「授業の言葉で言い換える」のねらい

DPを授業の言葉で言い換えると

「金融市場の発達について説明できるようになる」

① 授業内容そのもの

② 「学生」「受講生」が主語

③ 試験やレポートで判定できる

④ 受講生が、「〇〇ができるようになった」と、
具体的な**学びの手ごたえ**を持つ



6

改訂シラバスガイドラインのねらい **その1**

「授業の言葉で言い換える」のねらい

DPを授業の言葉で言い換えると



授業ごとに具体的な学びの手ごたえ
「〇〇ができるようになった」



(理想的には) **授業の数と同じ数の**「〇〇ができるようになった」

7

改訂シラバスガイドラインのねらい **その2**

③成績評価の方法

受講者が**②の達成目標に到達するために通って**
いく過程(課題や小試験等)と、**到達したことを示**
すエビデンス(最終レポートや期末試験等)のそ
れぞれの内容と配点を記述する。

8

改訂シラバスガイドラインのねらい **その2**

受講者が②の達成目標「〇〇ができるようになる」に到達するために

通っていく過程（課題や小試験等）

⇒ 目標達成のために勉強させる

「〇〇ができるようになる」ための

- ・ステップになる課題をさせる
- ・ステップを確認する小試験を課す

これは「**授業外学習時間の確保**」の手段に

9

改訂シラバスガイドラインのねらい **その2**

受講者が②の達成目標「〇〇ができるようになる」に

到達したことを示すエビデンス（最終レポート
や期末試験等）

⇒ エビデンスの点数は、どのくらい「〇〇
ができるようになったのか」の指標

⇒ だから学生にフィードバック

「**透明な成績評価**」が信州大学の文化に

10

改訂シラバスガイドラインのねらい **まとめ**

改訂ガイドラインのねらいは

1. 「〇〇ができるようになる」ことで
学びの手ごたえ
 2. 「〇〇ができるようになる」ための
課題等で授業外学習時間の確保
 3. 「〇〇ができるようになる」に直結した
成績評価で「透明な成績評価」
- 1 + 2 + 3 = 学生と社会の、大学教育への**信頼**

11

Part 1

達成目標編

12

やってみましょう！

例題

この到達目標は、どのDPに対応しますか。
この到達目標のどこがダメかを指摘し、書き直してみましょう。

【1年生の環境の授業】

信州の環境を理解しそこから今後の自分の
人生の強みを引き出すことができる。

13

やってみましょう！

例題

対応するDP:

環境マインド／地域環境に関する理解

人類知の継承

自己理解・自己啓発マインド

社会的行動マインド

問題発見・解決能力

等々,

担当教員の意図によって様々な組み合わせが可能

14

やってみましょう！

例題

到達目標を書くときに気をつけること：

1. 1つの文に1つの目標
2. 手段(学ぶ)ではなく目標(説明できる・問題解決できる・作品をつくる)
3. 知覚動詞(理解する・知る)に加え、行動を表す動詞(学んだ知識を応用できる、問題解決できる、説明できる、作品を作れる...)を
4. 確かめられる達成目標を

15

やってみましょう！

例題

この到達目標は、どのDPに対応しますか。
この到達目標のどこがダメかを指摘し、書き直してみましょう。

目標1

目標2

【1年生の環境の授業】

信州の環境を**理解し**そこから今後の自分の**人生の強みを引き出す**ことができる。

16

書き直しの例

例題

1. 信州の環境(の特徴)を説明できる。
2. 信州の環境に、自分が大学生活において関わることを1つ実践する。
(これは概要に書いても良い)
3. 信州の環境が、自分の大学生活をいかに豊かにするかを説明することができる。
(対応するDP: 信州の自然・文化的環境への興味と関心をみずから深めることができる【地域環境に関する理解】)

17

書き直しの例

例題

1. 信州の環境(の特徴)を説明できる。
2. 信州の環境に、自分が大学生活において関わることを1つ実践する。
(これは概要に書いても良い)
3. 信州大学における自分の生活の変化や向上を、信州の環境と関連づけて説明することができる。
(対応するDP: みずからを他者や社会とのかかわりの中で捉え、自己啓発に努めることができる【自己認識・自己啓発マインド】)

18

やってみましょう！

練習問題

同様にとりくんでみましょう。

【1年生の数学の講義の講義】

前半では日常使用している「数」特に整数の性質について学び、その不思議さ深遠さを理解します。後半ではグラフ理論のように数と形の両方の概念をもつ具体的な問題等、いくつかの話題を取り上げて数名でのグループ作業を取り入れながら性質や応用について考えます。

19

ヒント

練習問題

【1年生の数学の講義のねらい】

前半では日常使用している「数」特に整数の性質について学び、その不思議さ深遠さを理解します。後半ではグラフ理論のように数と形の両方の概念をもつ具体的な問題等、いくつかの話題を取り上げて数名でのグループ作業を取り入れながら性質や応用について考えます。

20

ヒント

学生が何ができるようになるのかが分かるように書き直して下さい。

練習問題

目標やねらいに書くよりも適切な場所を見つけて下さい。

前半では日常生活で使っている「数」特に整数の性質について学び、その不思議さ深遠さを理解します。後半ではグラフ理論のように数と形の両方の概念をもつ具体的な問題等、いくつかの話題を取り上げて数名でのグループ作業を取り入れながら性質や応用について考えます。

21

発表

練習問題

対応するDP:
達成目標:

22

Part 2

評価体系編

23

改訂シラバスガイドラインのねらい **復習**

改訂ガイドラインのねらいは

1. 「〇〇ができるようになる」ことで
学びの手ごたえ
2. 「〇〇ができるようになる」ための
課題等で授業外学習時間の確保
3. 「〇〇ができるようになる」に直結した
成績評価で「透明な成績評価」

1 + 2 + 3 = 学生と社会の、大学教育への**信頼**

24

やってみましょう！

例題

この成績評価の方法は、どこがなぜダメですか。

【〇〇学の授業】

講義時の課題やグループワークにおける提出物、複数回のレポートの内容・提出状況及び定期試験を総合的に評価します。レポートやグループワークの課題30%、期末試験70%です。

25

ヒント

例題

1. この点数配分は適切ではありません。なぜですか。

2. 学生の何を測っているのかわかりません。どのように表記すると良いでしょう。

【〇〇学の授業】

講義時の課題やグループワークにおける提出物、複数回のレポートの内容・提出状況及び定期試験を総合的に評価します。レポートやグループワークの課題30%、期末試験70%です。

26

点数の配分

例題

点数の配分は、学生に授業のどこが大事なのかを示すメッセージです。

- 点数配分が大きいところ＝重要
小さいところ＝重要でない
- この場合、「毎週の予習復習はそれほど必要ないが、最終試験だけがんばれば単位がとれる」と学生が誤解する可能性がある

27

点数の配分

例題

点数の配分は、学生に授業のどこが大事なのかを示すメッセージです。

- 点数配分によって、シラバスガイドライン改定のポイントである、授業期間中の「**過程が見える**」「**授業外学習が必要**」というメッセージを出す
- 平常点で60点とった学生が来なくなるのを防ぐには？

28

点数の配分と形成的評価

例題

自分は理解しているか否か、あるいは、理解していると思っけていても求められる水準に達しているのか、を確かめるには、評価が不可欠

学期における早い段階で評価することは、学生が自らの努力を修正するためのツール

=**形成的評価**

この場合、(相対評価ではなく)**絶対評価が前提**

29

何のための評価か

例題

レポートや課題はこなして終わりなのではなく、こなすことで何かを達成するためのものです。

- 評価者が「提出状況を見る」のであれば、学生は提出さえすればよいことになる
- 提出するのは大切だが、その中身がもっと大切であることを示す

30

何のための評価か

例題

レポートや課題はこなして終わりなのではなく、こなすことで何かを達成するためのものです。

- 知識の定着度合いをみるためならば、「**知識の定着を確かめるための**」復習テスト(レポート)
- 学んだ技術や方法が身についたかを確かめるためならば、「**実際に出来ることを確かめるための**」実技試験(プレゼンテーション・模擬授業)と明記すると伝わりやすい

31

書き直しの例

例題

1. 講義の前後に課す課題40点(出席しなければ課題を提出することはできない, 基本的な用語や理解を確かめる)
2. 中間試験30点(内容の基本的な理解とともに, 知識の応用力を確かめる試験を課す)
3. 期末試験30点(内容の基本的な理解とともに, 知識の応用力を確かめる試験を課す)

期末試験の受験を単位認定の条件とする。
60点未満は不合格, 60点以上合格。

32

書き直しの例(発展)

例題

〇〇を測るレポートや試験, 実技や発表が, DPと連続しているのが理想

- 基本的な知識の獲得→【人類知の継承】【科学リテラシー】
- 知識の応用力
 - 【情報活用力】「多様な情報を適切に取捨選択し、分析・活用できる」
 - 【問題発見・解決能力】「みずから問題を見出し、すじみちを立てて解決できる」ほか多数

33

「〇〇ができるようになる」ための課題

練習問題1

授業で設定した目標を達成するために(=**学生が何らかの努力をしなければならない**)手段や課題を考えます。ここに「**授業外学習時間**」を織り込みます。

- 知識を定着させるためなら…
- コミュニケーションがとれるようにするには…
- テキストを正確に読めるようになるには…

34

やってみましょう！

練習問題2

この課題のどこがダメかを指摘し、書き直してみよう。

【〇〇学の授業】

その授業で扱う単元を事前に教科書を読んで理解した上で授業に臨むことが望ましい。授業でその単元の解説をした後、教科書の理解を確かめるために小テストを課する。

35

ヒント

この課題のどこがダメかを指摘し、書き直してみよう。

「事前に読んで来い」と言っているのに、テストをするのは「解説の後」だと言っています。

あなたが学生だとしたら、事前にわざわざ読もうと思いますか？

【〇〇学の授業】

その授業で扱う単元を事前に教科書を読んで理解した上で授業に臨むことが望ましい。授業でその単元の解説をした後、教科書の理解を確かめるために小テストを課する。

36

書き直しの例

練習問題2

その授業で扱う単元を事前に教科書を読んで理解した上で授業に臨むことが望ましい。基本的な理解をしないと授業でその単元をより深く発展できないためである。

そのため、**授業の前日**に簡単な用語や概念に関する小テストをeAlps上で実施する。小テストは合計〇回行ない、最終成績に占める割合は〇%である。

37

「〇〇ができるようになる」に直結した成績評価

今回のガイドライン改定のねらいは、

成績は、学生の努力の結果である

という考えによって支えられています。

他の学生の優劣によって自分の成績が影響されることがないこと、あくまで成績は学生の責任であるということを教え、それによって**自分の学習成果に自信を持ってもらう**ためのものです。

38

「〇〇ができるようになる」に直結した成績評価

成績＝学生の努力の結果としてとらえるためには、学生がいつでも**自分の持ち点を自分で計算できる**ことが必要です。

- 学期の早い段階で小テストやレポートが課され、**点数と共に早めに返却される必要**があります。
- 自分の点の良し悪しによって、学生は自分の**勉強のしかたや努力の量が適切か否か**を反省することができます。

39

「〇〇ができるようになる」に直結した成績評価

授業で設定した目標が達成されたかどうかを**数字で見えるように**します。学生にさせる努力の結果を数値化します。以下は【たとえばの例】です。

- 知識を定着させるための復習テスト
各4点×15回＝60点
(各6点×10回＝60点)
- 論理的思考力を確かめるためのレポート30点
あるいは、
中間レポート20点＋期末レポート10点？

40

「〇〇ができるようになる」に直結した成績評価

【たとえばの例】つづき

- コミュニケーション力を測るための、
模擬診察課題〇点
- 言語操作能力を測るための、論述課題〇点
- 観察力を測るための写真アルバム作り
〇点

41

ありがとうございました！

アンケートにご協力ください。

- ご不明な点がありましたら、いつでもお尋ねください。
- 授業内で課するレポートの評価のしかた（ルーズブリック）などに関するワークショップもご用意しております。お気軽にお声かけ下さい。

katoy@shinshu-u.ac.jp

42

平成26年度新任教員FD
2014/04/3

信州大学の学生像

ーJCSS2012から読み取れたものー

高等教育研究センター 李敏
limin@shinshu-u.ac.jp

1

このセクションの目的

1. 信州大学の学生を理解する。
2. 学生にどのような支援を必要としているのかを整理する。
3. 一教員として、効果的な支援を提供できるように準備する。

2

調査概要

- 大学生調査(JCSS)
(JCIRP College Student Survey、略してJCSS)
⇒上級生を対象とする。
JCSS2012 ⇒ **今回ご紹介する内容**
 - 新入生調査(JFS)
(JCIRP Freshman Survey、略してJFS)
⇒新入生を対象とする。
JFS2013 ⇒ **分析中**
- その他の調査:学習時間調査、授業改善アンケート等々

3

調査概要

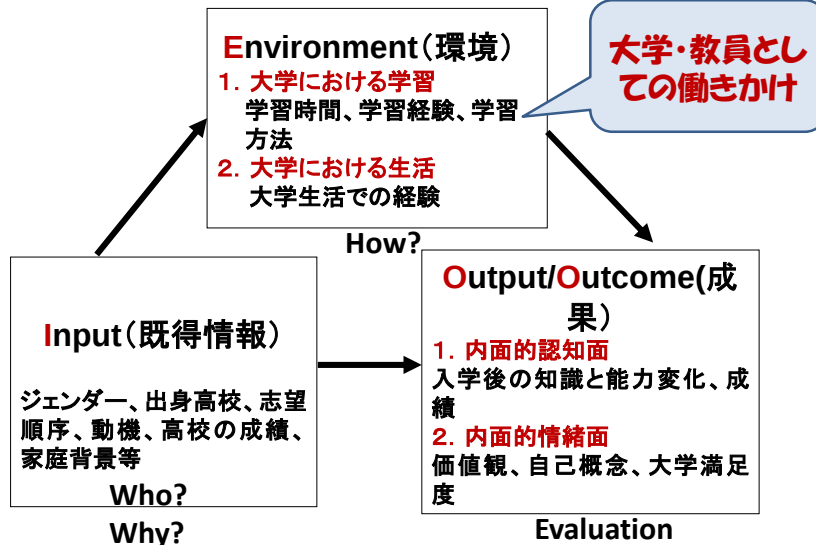
1. 調査期間 2012年11月
2. 調査対象の属性
 - 1)有効回答数: 1,344 そのうち:**4年生 1,284(96%)**
 - 2)各学部 of 回答数:

人文学部	26	教育学部	204	経済学部	89
理学部	96	医学科	104	保健学科	37
工学部	421	繊維学部	228	農学部	138

⇒ **4年間の大学生生活の振り返り**

4

分析枠組 I-E-Oモデル



Astin, A.W.(1993). *Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*, Phoenix, Arizona: ORYX Press. P.18

5

いかに学生の学習効果をあげるか。

E (環境): 学生が教育課程のなかで経験すること

- 大学の組織的特徴:

大学特性、**アドミッション・ポリシー**、**カリキュラム・ポリシー**、**ディプロマ・ポリシー**、専門分野等

- **学生関与**(学びの実態):

個人の努力: 学習時間の保証、学習習慣の定着

教職員支援: 学修支援(GPA、履修相談、キャリア支援、心のケア、ライティングセンター等々)

学生同士の関係: 学生によるピアサポート

⇒ 学生個々の差異があるにせよ、**大学における教育**を経て**成果**につながる。

6

Input (Who?)

家庭背景

項 目	全 学	各学部
保護者の学歴:短大・大卒・大卒以上	父親57%(46%) 母親48%(40%)	医: 父親73% 母親70%
奨学金の受給率(授業料免除も含む)	50% その内(2種受給:5.4%、3種類受給:0.6%)	

信大生の保護者の学歴が比較的に高い。

注:()の数値は他大学を含む全調査大学の平均値(以下同)

7

Input (Who?)

出身高校

項 目	全 学	各学部
出身高校:公立高校	79%	医:私立 45%
高校の成績:「中の上」と「上位」	45%	医:56%

公立高校の出身者が8割近く占めている。
比較的に学力の高い学生が進学している。

8

Input (Who?)

背景志望

項 目	全 学	各学部
第一志望で進学した学生 (不本意進学した学生)	56%(53%) 44%(47%)	農:69%、経:66% 保:62%
自分の大学生活が充実している	88%	教:93% 農、保:92% 医:91%、織:90%
もう一度選び直せるとしても信州大学に入学する	45%	農:54% 教:52%

- 実は、高卒の時点で、明確な進路展望を持っている学生は少ない。
- 大学生活に対する評価はかなり高い。

9

Input (Why?)

進学動機・全学

- | | | |
|------------------|-----|---|
| • 本学の合格可能性が高かった | 79% | ① |
| • 入試科目が自分に合っていた | 72% | |
| • 大卒の学歴を得ることができる | 69% | ② |
| • 学生生活を楽しんでみたかった | 68% | ③ |
| • ひとり暮らしができる | 57% | |
| • 学費が適当であった | 61% | ④ |
| • 本学で学ぶ内容に興味があった | 59% | ⑤ |

10

Input (Why?)

進学動機・全学

- ①入試の策略 学力相当の大学
- ②大学の学歴の社会的効用に注目する
- ③大学生活への憧れ
- ④国立だから
- ⑤信州大学だから

⇒ **学力、家庭の経済状況が進学行動に強く影響する。**

11

Input (Why?進学動機・各学部)

- 人:「学生生活を楽しんでみたかった」 92%
「本学で学ぶ内容に興味があった」 81%
- 教:「資格を取ることができる」 42%
- 経:「親の希望」51%
「高校の先生に勧められた」 51%
- 理:「入試科目が自分にあっていた」 52%
- 医:「資格を取ることができる」 77%
- 保:「資格を取ることができる」 95%
- 工:「大卒の学歴を得ることができる」 77%
- 農:「本学で学ぶ内容に興味があった」 87%
- 織:「本学で学ぶ内容に興味があった」 78%
「卒業生の就職がよい」 65%
「研究に対する評価が高い」 61%

12

Input (Who?)

通学状況

項 目	全 学	各学部
自宅外通学	88% (60%)	経済学部: 78%
片道通学時間30分未満	91% (61%)	経済学部: 85%

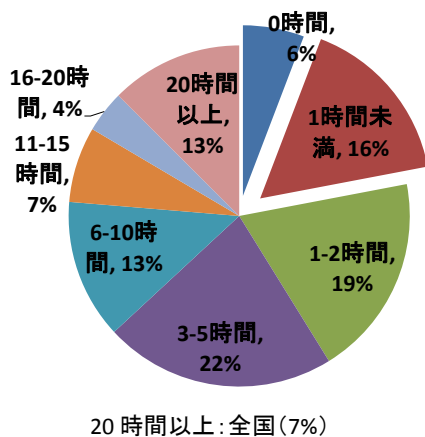
**大学の近辺に下宿するケースが多いことは、
本調査に参加した他大学と比べて特徴的ところである。**

13

大学における学習

学 習

• 授業外学習時間(1週間)



- 勉強している学生と勉強しない学生の**二極分化**
- ただし、学部によって、授業、実験の時間が長いために、授業外学習時間を圧迫してしまうこともある。(例えば、医学科)

14

学 習

・授業外学習時間の影響要因

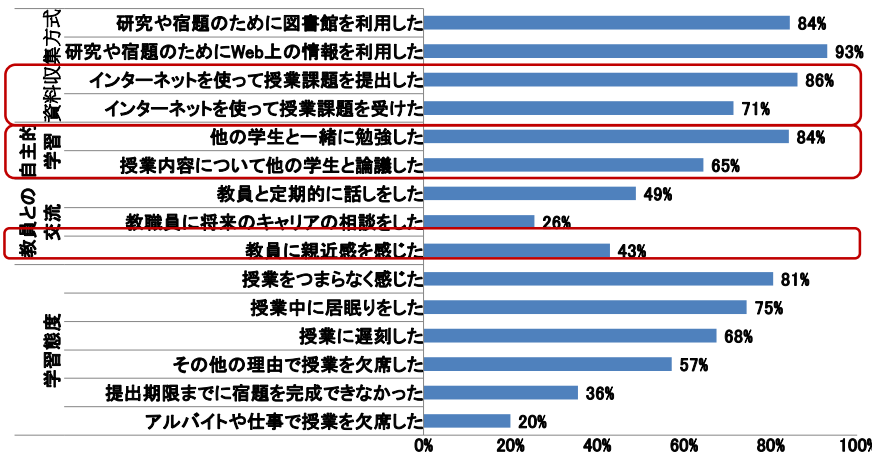
- ① 読書時間の長い学生は授業外学習時間が長い。
- ② 部活動やアルバイトなどの課外活動は、学生の授業外の学習時間を圧迫しない。

⇒適切な課外活動は、視野の拡大ややる気の向上などに積極的な効果を持っている。

大学で授業外学習時間の長い学生は、大学での成績が良い。

15

学習方法



16

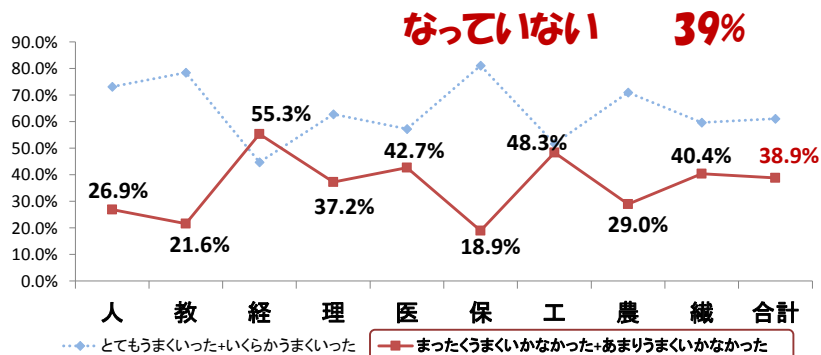
学 習

- ・ インターネットを利用して勉強する。
- ・ 自主的学習を友人とともに勉強する。
- ・ 教員との交流は本調査参加の他大学と比べ、多いものの、教員に親近感を感じた学生は43%にとどまっている。

17

大学生活への適応

- ・ 他の学生と友情を深める 84%
- ・ 大学教員と顔見知りになる 61%



入学してから、大学教員と顔見知りになったのか

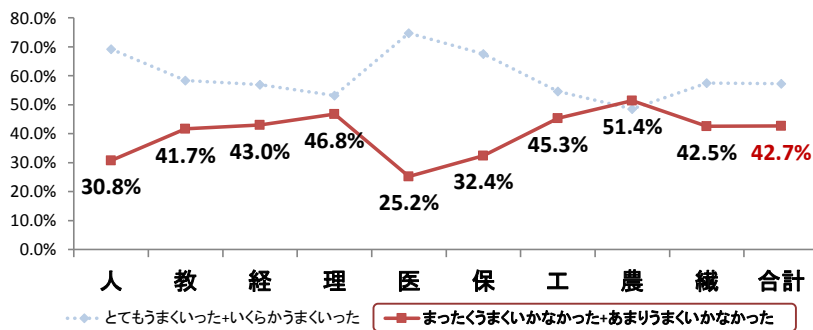
18

- 教員が日々の教育の中で学生との接触を増やしたり、学生を個人として知ることが求められる。

19

大学における生活

大学生活への適応



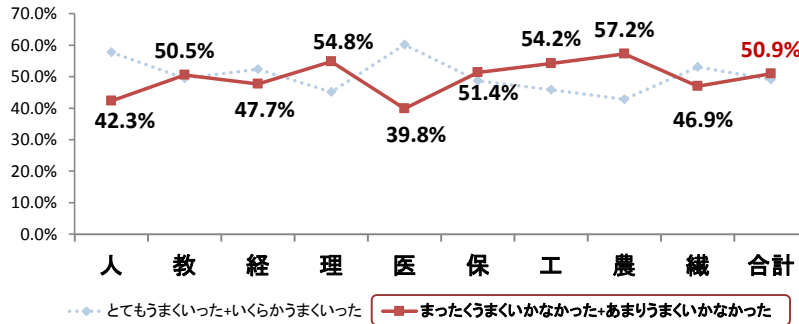
効果的に学習する技能の習得

「まったくうまくいかなかった+あまりうまくいかなかった」
全学 43%

20

大学における生活

大学生活への適応



時間を効果的に使う

「まったくうまくいかなかった+あまりうまくいかなかった」

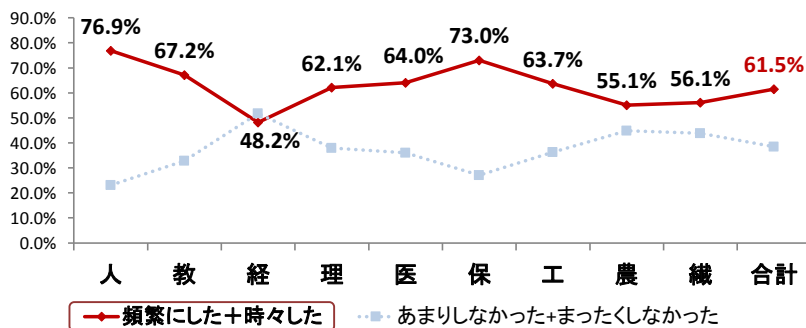
全学: 51%

⇒ 1年次の時に、学習技能に関する指導が不可欠である。

21

大学における生活

大学生活への適応



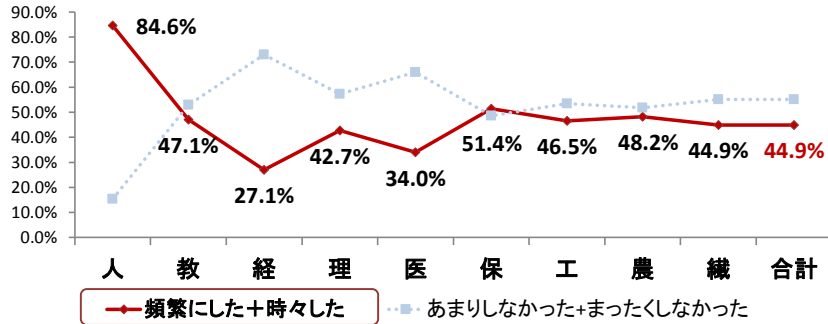
やるべきことの多さに圧倒された

「頻繁にした+時々した」 全学: 62%

22

大学における生活

大学生活への適応



ゆううつで、落ち込んだ

「頻繁にした+時々した」全学：45%

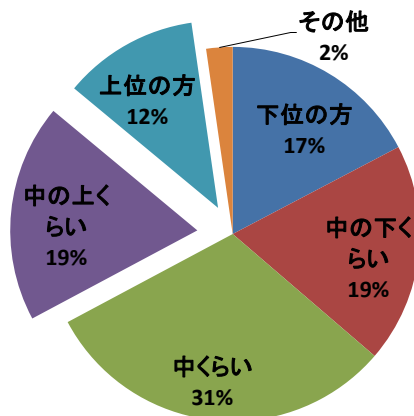
⇒保健センターのような専門機関によるカウンセリング以外に、日々の学修支援、学生指導の際にも、学生に対する心理的ケアも必要である。

23

Outcome

学習成績

・ 本学での成績



上+中の上 3/1
中 3/1
下+中の下 3/1

24

Outcome

学習成績

• 成績不振の学生の特徴

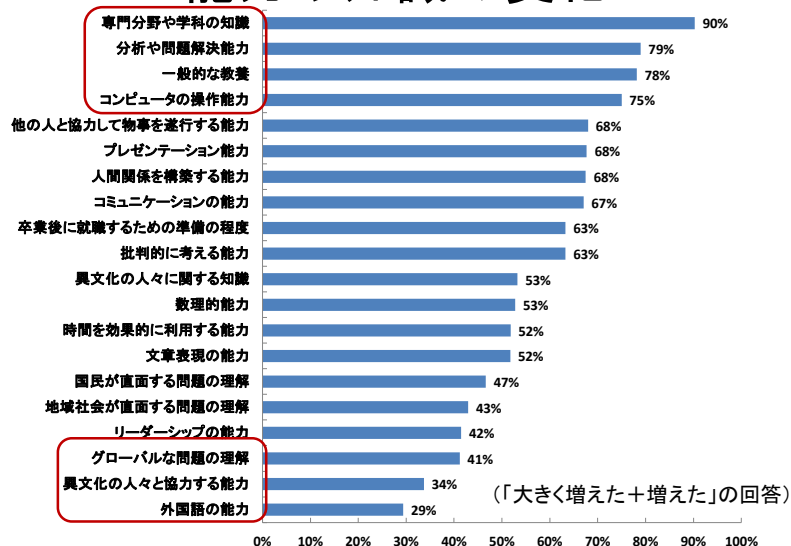
(在学中の成績: 中の下+下位)

- 高校成績が下位の学生
- 不本意入学の学生
- 他の学生との交流、共同学習経験の少ない学生
- 授業後、勉強しない学生(授業外学習時間の短い学生)
- 奨学金をもらっていない学生(奨学金をもらっている学生が勉学に励んでいる。)

25

Outcome

能力や知識の変化



入学時と比べて、能力や知識の変化

26

Outcome

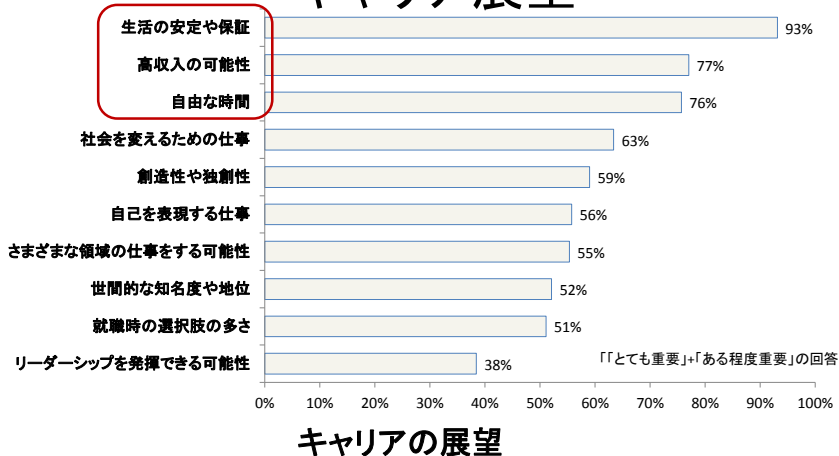
能力や知識の変化

- **増えた:** 専門知識、教養知識、分析や問題解決能力、コンピュータの操作能力
- **増えていなかった:** 外国語能力、異文化の人々との交流能力、グローバルな問題の理解

27

Output

キャリア展望



生活を大切にする学生の特徴が見られる。

28

Output

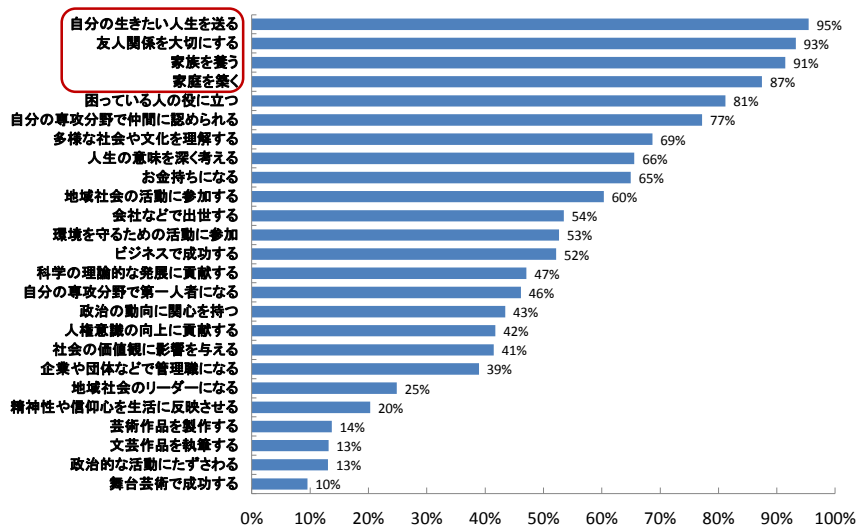
キャリア展望

- ・ **人**:「安定志向」、「自由な時間」
- ・ **教**:「就職時の選択肢の多さ」を重視しない
- ・ **経**:「世間的な知名度や地位」
- ・ **理**:平均的
- ・ **医**:「高収入」
- ・ **保**:「高収入」、「出世」より、「自分の生活」、「友人」を大事にする。
- ・ **工**:「高収入」、「知名度や地位」
- ・ **農**:「高収入」、「知名度」、「出世」のことを重視する割合が平均より低い。 ⇒ 淡泊的？
- ・ **織**:「高収入」、「生活の安定や保証」、「創造性や獨創性」、「就職時の選択肢の多さ」

29

Output

価値観



30

価値観

- **人**:「自分らしい人生」、「家族・友人」
- **教**:「出世」と「金銭」よりは、「困っている人の役に立つ」、「人生の意味を深く考える」、「地域社会の活動に参加する」、「友人関係を大切にする」、「自分の生きたい人生を送る」
- **経**:「管理職になる」、「会社などで出世する」、「お金持ちになる」、「ビジネスで成功する」
- **理**:「科学の理論的な発展に貢献する」。
「家族を養う」と「家族を築く」平均より低い
- **医**:「自分の専門分野で第一人者になる」
「科学の理論的な発展に貢献する」
- **保**:「高収入」、「出世」より、「自分の生活」、「友人」を大事にする。
- **工**:「管理職になる」、「会社などで出世する」、「お金持ちになる」、「ビジネスで成功する」、「科学の理論的な発展に貢献する」
- **農**:「環境を守るための活動に参加する」、「多様な社会や文化を理解する」
- **織**:「管理職になる」、「会社などで出世する」、「お金持ちになる」、「ビジネスで成功する」、「科学の理論的な発展に貢献する」

31

まとめ

- 信州大学の学生の強さと弱さは何か。
- あなたが所属する学部の学生にはどのような特徴があるか。

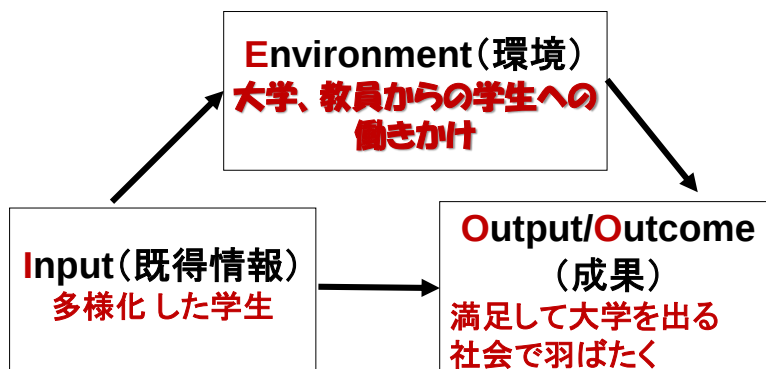
32

まとめ

- **合格の可能性**及び**家庭の経済力**が信大進学
の主な基準となっており、大学・学部への愛
着が入学してからのこととなっている。
- 進学してからは大学生活に対する満足度が
高い。
- **学習方法の習得**及び**学習習慣の養成**が課題
である。
- キャリアに関しては、**自分の生活を大事にす
る**傾向がある。

33

まとめ



34

まとめ(提言)

- 学習習慣と学習時間は学生の成績、ひいては大学卒業後のキャリアアップに大きく影響するため、学生の**学習習慣を定着させる**ことが重要である。
- **大学生としての生活(学習方法、心のケア)**を**教員が学生との接触を増やす**ことで、教員との人間関係の中で伝えていくことが望まれる。

35

ご静聴、どうもありがとうございました。

コメントとご質問は
limin@shinshu-u.ac.jpへどうぞ！

36

大学生調査 2012 年 (JCSS2012 信州大学)

調査概要：

1. 調査期間 2012 年 11 月

2. 調査対象の属性

1) 有効回答数： 1,344 , その内：4 年生 1,284(96%)

2) 各学部（学科）の回答数：

人文学部 26

教育学部 204

経済学部 89

理学部 96

医学科 104

保健学科 37

工学部 421

繊維学部 228

農学部 138

3) 性別：男性 971 (73%)

女性 354 (27%)

3. まとめ（信大生の平均像）

信大生の多くは公立高校から進学した比較的学力の高い学生である。保護者の半数以上は大学卒や短大卒の学歴を持っている。半数の学生が、奨学金や、授業料免除などの経済的支援を受けている。

6 割の回答者が、「ひとり暮らしができる」ことを信大への進学の理由としている。9 割程度の学生が大学の近辺に下宿している。

第 1 志望で信大に進学した信大生の割合が 6 割未満であるにもかかわらず、9 割近くの学生が「大学生活が充実している」と評価している。信大に進学した理由は、「学力相当」と「学費」を挙げた学生が多い。つまり、学力と親の経済状況の 2 点を考えた進学が多い。「本学で学ぶ内容に興味があった」ことも学生を引き付ける大きな要因である。

9 割の学生が受講した授業で「定期的に小テストやレポートが課される」と回答している。教員も「教育課程や授業に対する助言や指導」を積極的に行っている。学生同士で一緒に勉強したり、授業について議論したりする自主的学習も多く行われている。ウェブでの授業の受講と課題の提出が普及している。

信大生は大学の専門教育に対する満足度が高く、4 年間を通して、もっとも増加したと学生が回答したのは専門的知識である。一方、語学に対する満足度は他の項目と比べて若干低い。日々の学習のほかに、学生と教員との懇親会、同好会への参加、さらに学生同士の付き合い、学内スポーツへの参加などの学生と教員、そして学生同士のつながりは極めて強い。このことは他大学と比べ、かなり特徴的である。入学してからは信大生の 8 割が「他の学生との友情を高めた」が、残念ながら 6 割が「大学教員と顔見知りになる」程度で卒業していく。一方、学外の活動については、他大学ほど頻繁ではない。

信大生の学習時間は全国平均よりは多い。ただし、授業外の学習時間には二極化が見られる。学習時間の長さは、在学中の成績に大きな影響を与えている。適切な部活動や同好会、アルバイト活動は、授業外の学習時間を圧迫することなく、成績に悪い影響を与えないことが確認できた。

個人の学習や履修・成績に対するアドバイスなど、学生個人を対象とした指導に対するニーズが高い。注目すべきは、6割を超える学生が「やることの多さに圧倒された」、45%の学生が「ゆううつで、落ち込んだ」経験をしたことである。

大学卒業後のキャリアに関して、多くの信大生が求めるのは「安定性」、「高収入」、さらに「自由な時間」である。自らの生活を大事にするという特徴が見られた。「家族」、「友人」を大事にする価値観が多く、信大生の中に見られた。

4. 提案

- 1) 学習習慣と学習時間は学生の成績、ひいては大学卒業後のキャリアアップに大きく影響するため、いかに学生の学習習慣を定着させるかが重要である。現状では、一週間当たりの授業外学習時間が5時間未満の学生が63%存在するので、これをまず改善することが必要であろう。
- 2) 学生が大学における学習と生活を効率的に計画するため、学習、履修、成績に対するアドバイスの体制を強化する必要がある（「履修や成績に対するアドバイス」（とても満足または満足、以下同） 14%、「教職員による学生支援体制」 14%、「個人別の学習指導や援助」12%）。
- 3) 専門的なカウンセリング部門以外に、教員が日々の教育の中で学生との接触を増やしたり、学生を個人として知ることが求められる。

調査結果の概要

1. 学生の属性 Q7、Q8、Q9、Q34

2012 年度の 4 年生は 79%が公立高校の出身であり、高校の成績が「中の上」と「上位」の学生が 45%占めているように、比較的に学力の高い学生が進学している。

保護者の学歴を見ると、父親の 57%、母親の 48%が大学や短大を卒業している。家族の中に信大出身者がいるのは 13%に達している。

50%の学生は、奨学金や授業料の免除など何らかの経済的支援を受けている。

88%の学生は自宅外通学者で、91%の学生は片道通学 30 分未満で大学の近辺に住んでいる。

全国調査と比べ、信大生は保護者の学歴（全国：父親 46%、母親 40%が大卒または短大卒）が若干高い。また大学の近辺に下宿する学生が多いところに特徴がある（全国：自宅通学者：60%、片道通学 30 分未満：61%）。

2. 進学理由 Q11、Q12、Q35

第 1 志望で信大に進学した学生は 56%を占めている。一方で第 2 志望以下、つまり不本意入学の学生は 44%いるということである（全国：47%）。ただし、「あなたの学生生活は充実しているか」（Q35）という質問に対して、88%の学生が「充実している」、「ある程度充実している」と 4 年間の大学生活をポジティブに評価している（全国：83%）。一方、「もし大学を選び直せたら、もう一度本学に進学する」と答えた学生は 45%（全国：37%）にとどまり、逆に「進学しない学生」が 38%（全国：41%）いる（図 1）。

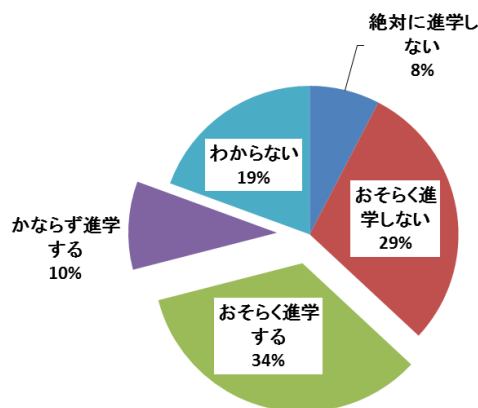


図 1 もし大学を選び直せたら、もう一度本学に進学するか

進学理由については、「合格可能性が高かった」という理由がもっとも高い（79%）。また「本学で学ぶ内容に興味があった」と回答した学生は 59%を占めている。「親の希望」と「高校の先生に勧められた」学生がいずれも 37%いる。この割合は全国調査と大差は見られない。「学費が適当であった」という理由をあげたのは 61%であり、全国の 41%より 20%高い。また、信大生の 57%は「ひとり暮らしができる」ことを進学理由とし、これは全国の 37%を大きく上回る回答率である（図 2）。

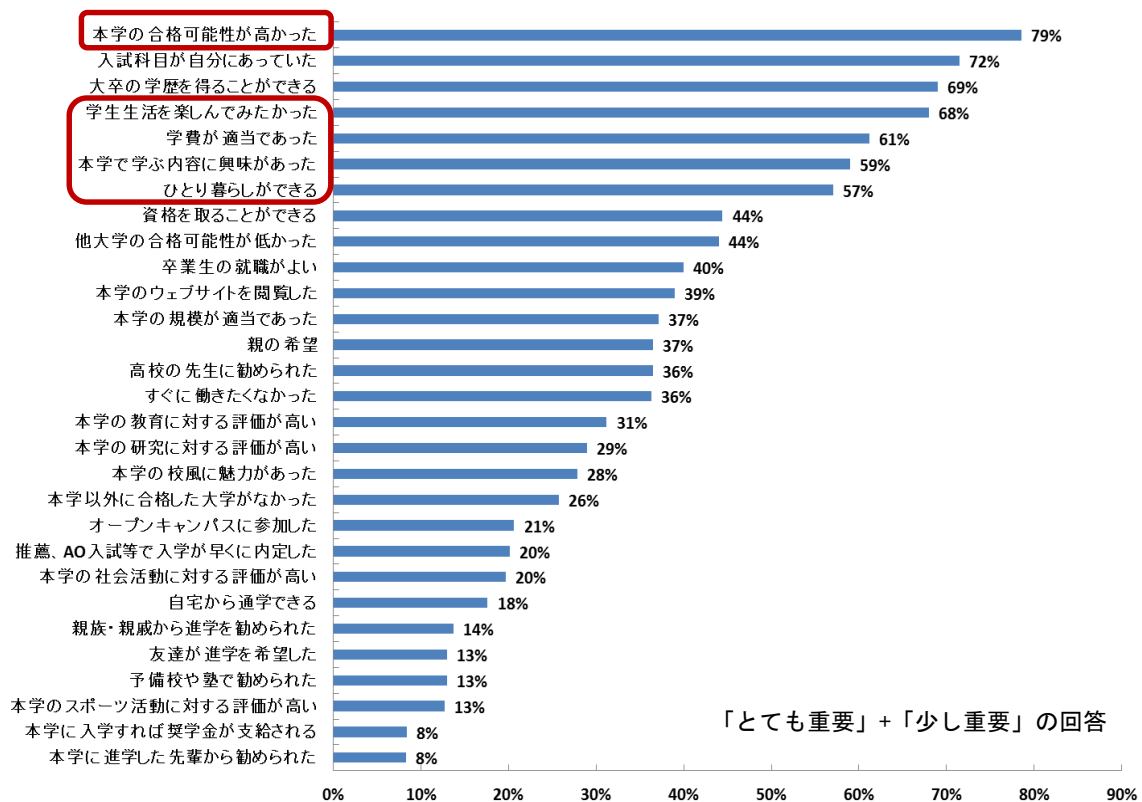


図 2 進学理由

全国調査と比べると、信大生は不本意進学 of 比率が若干低く、大学生活に対する満足度もやや高い。進学理由については、「学費が安い」、「ひとり暮らし」ができるという理由が多い。

3. 大学における学習

3.1. 授業外学習時間 Q23 とクロス集計

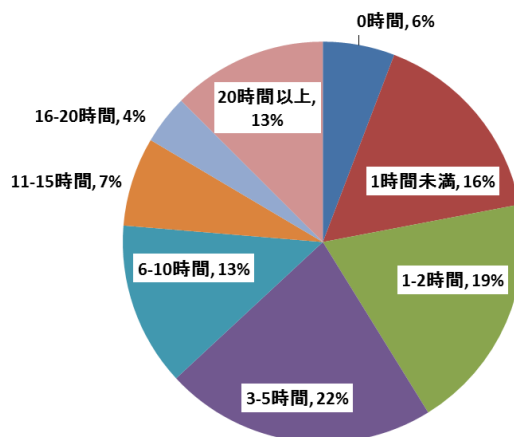


図 3 授業外学習時間

授業以外で一週間当たり 6 時間以上勉強する学生が 37%（全国：26%）いる一方で、1 時間未満の学生も 22%（全国：27%）いる。つまり勉強している学生と、それほど勉強していない学生との二極分化が進んでいる。ただし、一週間あたり 20 時間以上勉強する学生が 13%（全国：7%）程度いることは極めて頼もしい結果と言える（図 3）。

「部活動や同好会の参加」と授業外学習時間との間に有意な関係は見られない。一週間当たりに「部活動や同好会」の参加時間が 20 時間以上を超える学生の中に、授業外の学習時間が 20 時間以上の学生が 16%いる。逆に、一週間当たりの「部活動や同好会」の参加時間が 1 時間未満の学生の 25%は授業外学習時間が 1 時間も満たない。

「アルバイト」についても、やはり授業外学習時間との間に有意な相関は見られない。このように、適切な部活動や同好会、アルバイト活動は、授業外の学習時間を圧迫することではなく、視野の拡大などの積極的な効果を持っていると言えよう。

読書時間と時間外学習時間とは有意な相関がある。読書時間が長い学生の方が、往々にして授業外の学習時間も長い。

高校での成績は大学での授業外学習時間と有意な相関が確認されなかったが、大学で授業外学習時間が長い学生は、大学での成績が優秀である。つまり、高校の成績というよりは、学習習慣によって成績の差が表れてくるといえることが言えよう。

女子学生の学習時間が男子学生より長い傾向があるが、それほど大きな差は見られない。

全国調査と比べ、信大生は授業外学習時間が長いという特徴がある。信大生は「コンパや懇親会などに参加する」時間、「読書をする」時間が他大学より若干多い。

3.2. 学習経験 Q18

4 年間の学習の中で、85%の学生は「学生の同好団体」に加入した経験を持っている。69%の学生は「単位を取得できなかった授業」があった。「補習授業を履修した」学生は 12%いる。インターンシッププログラム、異文化理解のワークショップに参加した学生はそれぞれ 8%と 7%にとどまっている。

全国と比べると、信大生は「学生の同好団体」に加入した割合が高い（全国：75%）。信大生は「女性学の授業を履修した」（信大：3%、全国：16%）、「人権や民族に関する授業を履修した」（信大 25%、全国：33%）割合が低い。

3.3. 学習方法 Q19

84%の学生が「他の学生と一緒に勉強した」。「授業内容について他の学生と議論した」学生も 65%いる。つまり、自主的学習を行っている学生がかなりの割合に達している。「研究、宿題のために Web 上の情報の利用」、「インターネットを使って授業課題を受ける」と「提出」の経験を持っている学生は 8 割を超えている。インターネットが学習方法を大きく変えたことを如実に物語っている（図 4）。

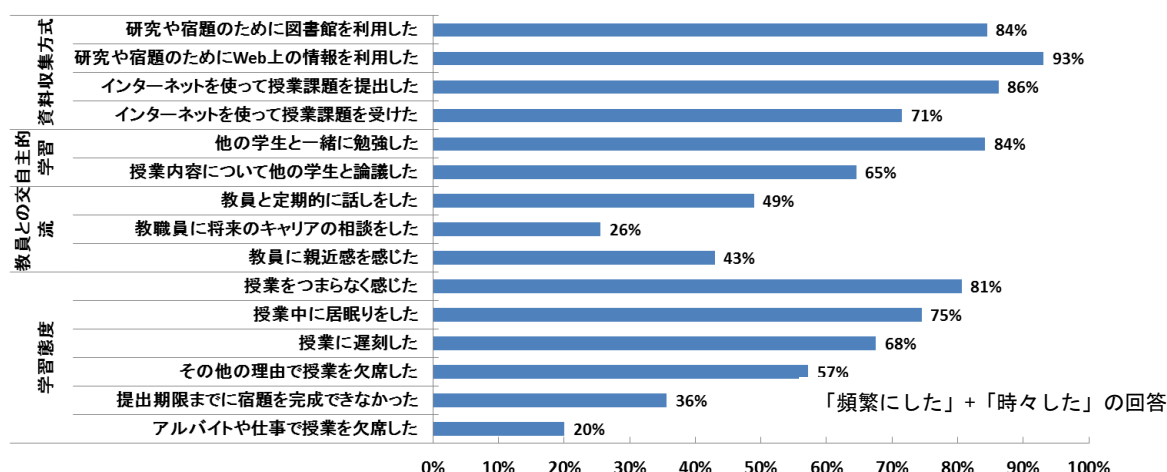


図 4 学習方法

全国調査と比べ、信大生は「授業内容について他の学生と議論した」（信大：65%、全国：61%）、「教員とその自宅や飲食店で懇親会を持った」（信大：50%、全国：39%）、「学内のスポーツに参加した」（信大：52%、全国：39%）というような教員と学生同士の交流経験が多い。

3. 4. 授業における経験と教員の学習への関与 Q21、Q24

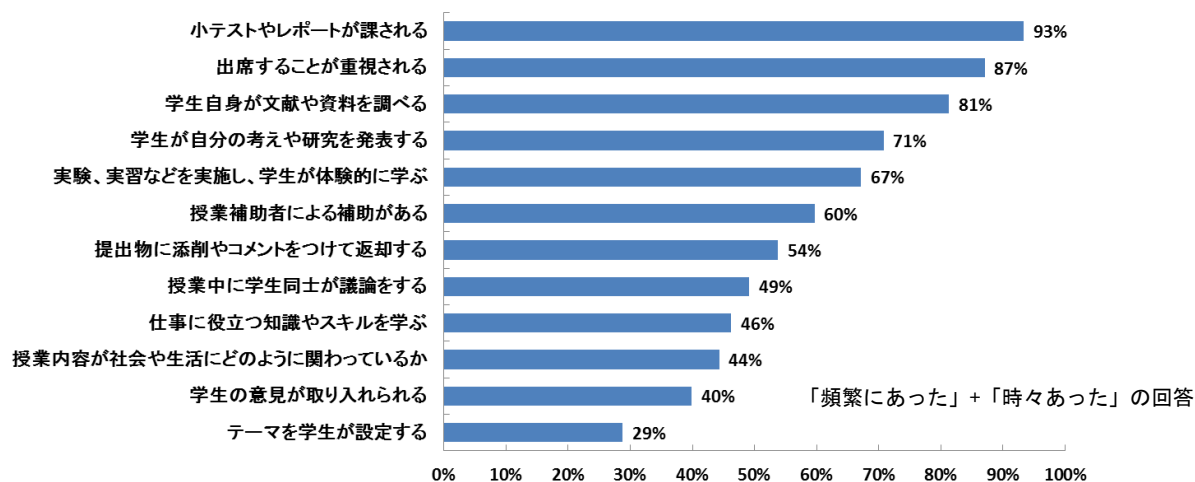


図 5 授業における経験

大学における授業で、「小テストやレポートが課される」と「学生自身が文献や資料を調べる」という内容の割合がそれぞれ 93%と 81%に達している。学生の学習時間の確保のために、教員の努力がうかがえる。「出席することが重視される」との回答も 87%ある。この特徴は全国平均と大差はない（図 5）。

全国調査と比べ、信大の授業は「授業補助者（TA・SA など）」（信大：60%、全国：47%）による補助が多い。ただし、「授業中に学生同士が議論する」（信大：49%、全国：61%）、

「授業の進め方に学生の意見が取り入れられる」（信大：40%、全国 48%）などの学生による主体的な参加は若干少ない。

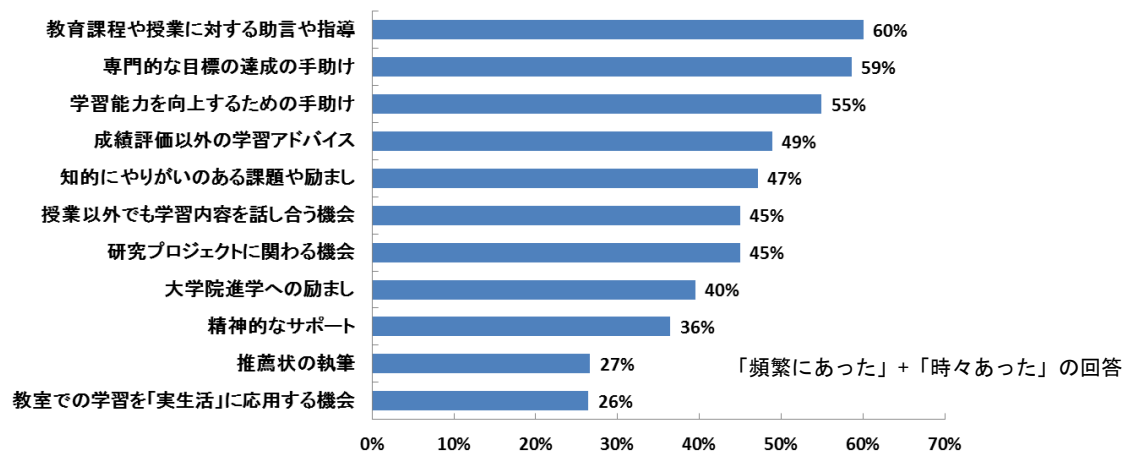


図 6 教員の学習への関与

一方、教員が学生の学習に対して、もっとも多く行っているのは、「教育課程や授業に対する助言や指導」（信大：60%、全国：52%）、「専門的な目標の達成の手助け」（信大：59%、全国：45%）、「学習能力を向上するための手助け」（信大：55%、全国：49%）である（図 6）。

全国調査と比べ、信大の教員は学生の学習と生活に多くかかわっているという特徴が見られる。

3. 5. 大学教育への満足度 Q25

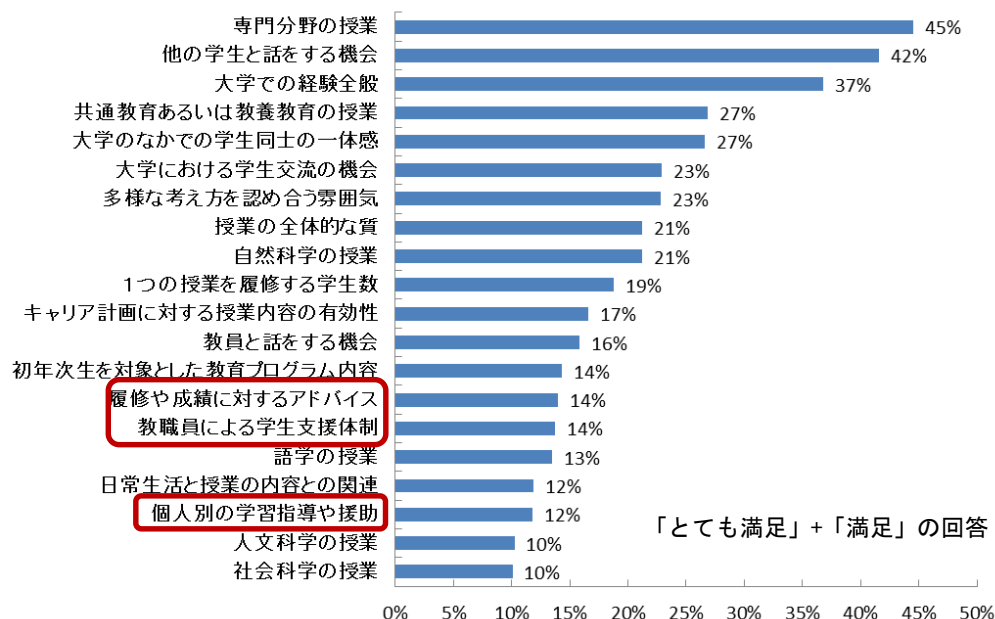


図 7 大学教育への満足度

学生は、専門教育に対する満足度が高い。「大学が学生同士の交流機会を提供する」ことに対して、高く評価している。語学、学生個々のニーズに対する援助（個人別の学習指導、履修、成績に対するアドバイス等）に関してはまだ改善の余地がある（図 7）。

全国調査と比べ、信大生は語学教育に対する不満が若干高い（信大：31%、全国：21%）。

3.6. 大学での成績 Q27

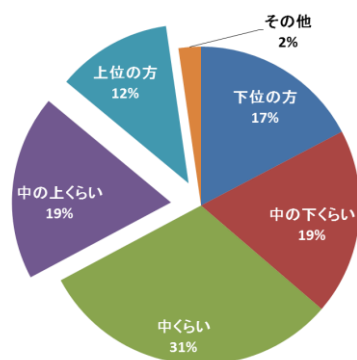


図 8 大学での成績

信大での成績は「上または中の上」、「中」と「中の下または下」がそれぞれ 3 分の 1 を占めており、正規分布の関係を表している（図 8）。

一方、成績が「中の下または下」の学生の特徴は、ロジスティック回帰分析の結果、およそ以下の特徴が見られる。高校成績が下位であり、不本意入学である場合が多い。そして、授業の欠席が多く、他の学生との交流、共同学習経験も少ない。さらに、授業外でも勉強しない。奨学金の受給は成績不振と負の有意な関係があり、奨学金をもらった学生は学習に励む傾向がある。

学習時間と同様に、部活動、同好会の参加とアルバイト活動は学習成績にマイナス影響を与えることは確認されていない。

4. 大学における生活

4.1. 大学生活での経験 Q20

生活の中で最も多く経験したのは、「ビールやワインなどアルコール飲料を飲んだ」ことである（信大：頻繁にあった 42%、時々あった 44%；全国：33%、42%）。「留学生と交流した」経験を持っている学生は 31%いる。注目すべきは、「ゆううつで、落ち込んだ」学生が 44%（全国：49%）いることである。その中で、13%（全国：15%）の学生が常にゆううつを感じていると答えている。「やるべきことの多さに圧倒された」経験を持っている学生が 61%（全国：65%）いる。一方、「個人的にカウンセリングを求めた」ことのある学生はわずか 8%（全国：8%）しかいない（図 9）。

全国調査と同様に、信大生はゆううつを感じる学生がかなりいることに注目すべきである。またアルコール飲料を飲む経験が多いことが特徴的である。

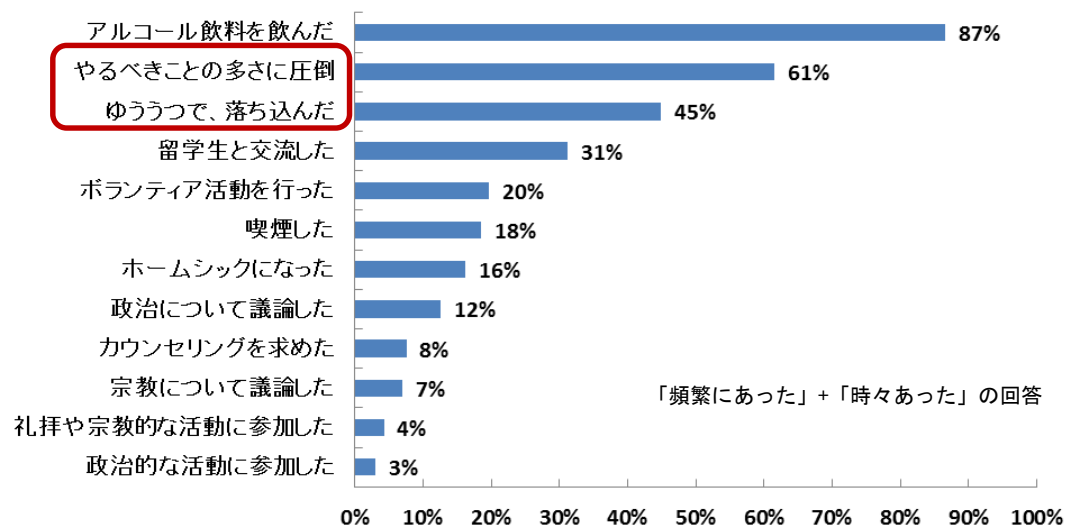


図 9 大学生活での経験

4. 2. 大学の施設やサービス面での満足度 Q17

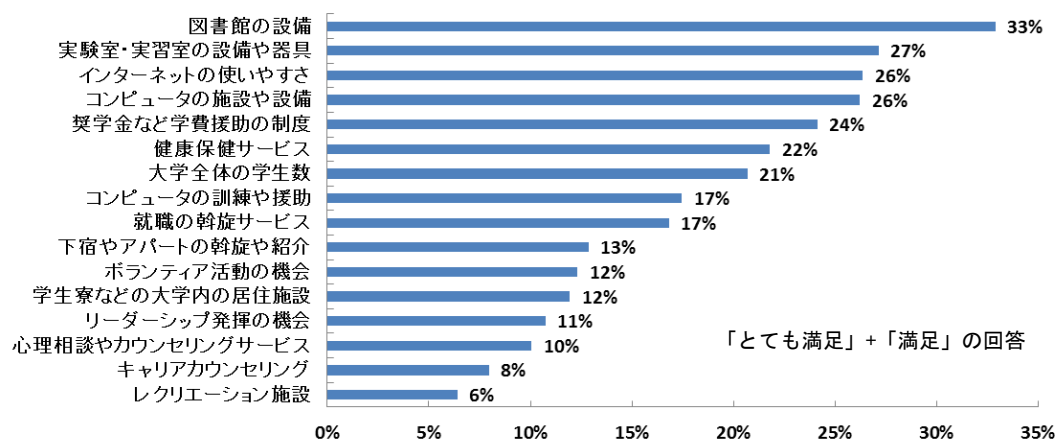


図 10 大学の施設やサービス面での満足度

信大の「奨学金などの学費援助の制度」及び「健康保健サービス」に対して、「満足」あるいは「とても満足」と評価した学生は 20%を超えており、不満に思う学生を大きく上回っている。一方、「図書館」、「コンピュータの施設や設備」、「実験室・実習室の設備と器具」に対して、満足に思う学生の割合が不満に思う学生よりも若干上回るが、意見は分かれている。学生寮や下宿の斡旋の項目に関しては、不満が満足より若干上回っている（図 10）。

全国調査と比べ、信大生は「ボランティア活動の機会」に対する満足度は 12%にとどまり、全国調査の 27%よりかなり下回る。

5. 大学生活への適応と知識能力の変化

5. 1. 大学生活への適応 Q16

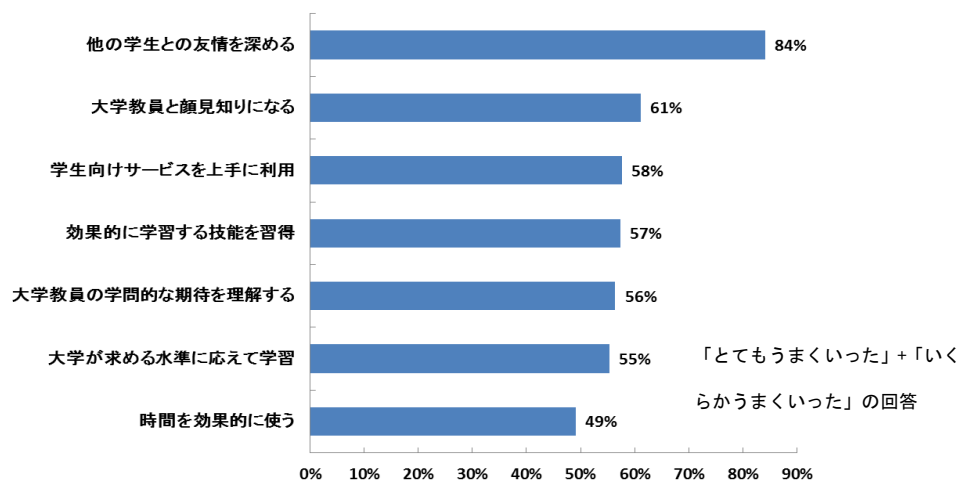


図 11 大学生活への適応

入学してからは、多くの学生が「他の学生との友情を深めた」（信大：84%、全国：83%）、
「大学教員と顔見知りになった」（信大：61%、全国：61%）。つまり、4年間の大学生活を
通して、人的ネットワークの拡大が認識されている。ただ、4年間信大にいるにもかかわらず、16%の「他の学生と友情を深める」ことのできない学生と、39%の「大学教員と顔見知りになっていない」学生により注目する必要がある（図 11）。

この部分の質問項目に関しては、信大生の回答は全国調査と大きな差は見られない。

5. 2. 知識と能力の変化 Q26

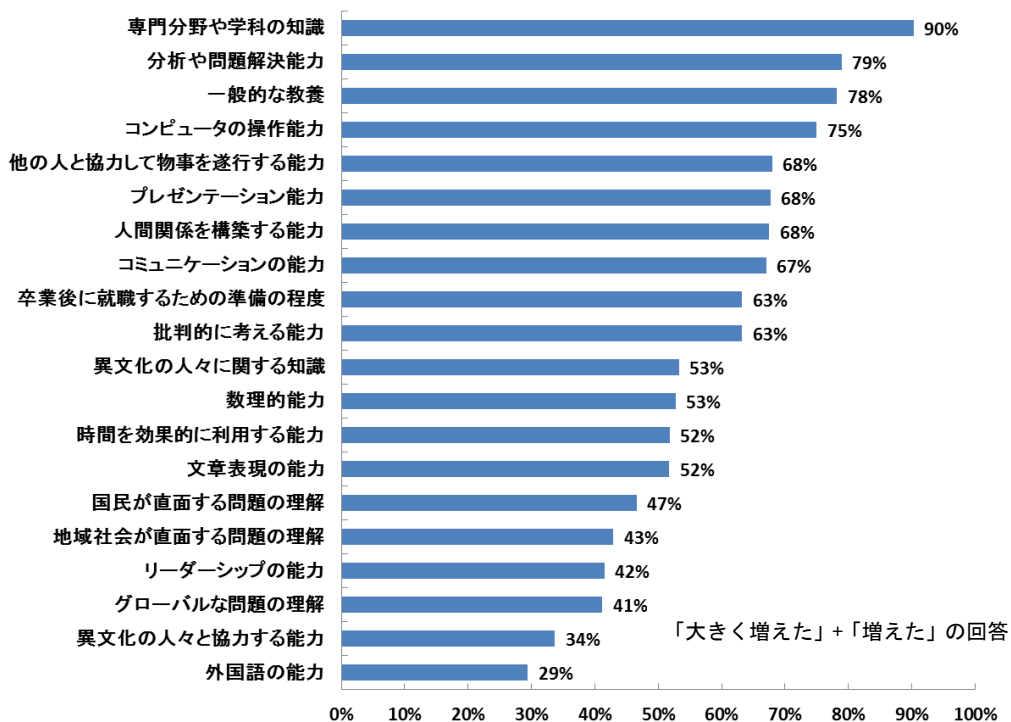


図 12 知識と能力の変化

4年間の学習を通して、信大生は専門知識、教養知識、分析や問題解決能力、コンピュータの操作能力などに関する能力の増加が確認された。外国語や異文化の人との交流の能力の増加は少ない（図 12）。

全国調査と比べると、ほとんどすべての知識と能力の増加に関して、信大生は全国平均より上回っている。

6. 進路と価値観

6.1. 進路 Q28

大学院進学希望の学生は 41%いる。中には博士課程を修了することを希望する学生が 8.1%いる。学部別の進路希望は平成 24 年度の卒業生の実際の進路希望と一致している。

6.2. キャリアについて Q30

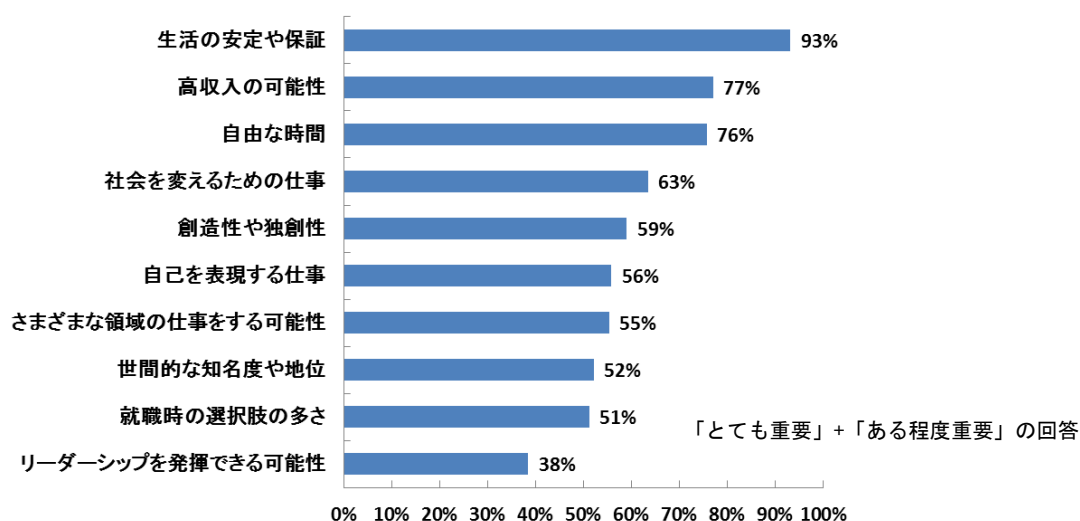


図 13 キャリア展望

大学卒業後のキャリアを考えると、信大生がもっとも重視するのは「生活の安定や保証」（93%）である。これに次ぐのは「高収入」（77%）と「自由な時間」（76%）の項目である。生活を大切にする学生の特徴が見られる。これは全国調査と同じ傾向を示している（図 13）。

6.2. 価値観 Q31

信大生は「自分の生きたい人生を送る」（95%）ことをもっとも重要だと思っている。同様に重要に思うのは「友人」関係である（93%）と「家族」（91%）。「困っている人の役に立つ」意識を持っている学生は 81%に上っている。また、「多様な社会や文化を理解する」（69%）、「地域社会の活動に参加する」（60%）、「環境を守るための活動に参加」（53%）ことを重要だと思っている学生もかなりの割合に上っている。これは信大が力を入れている教育の成果とも言える（図 14）。

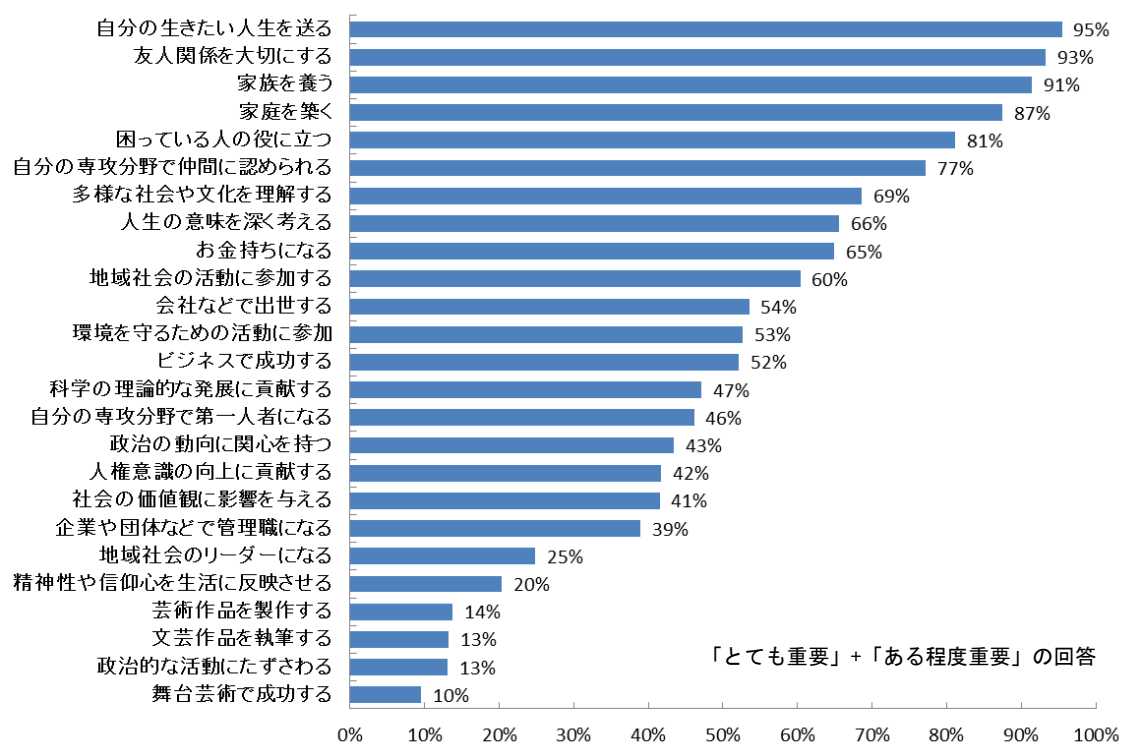


図 14 価値観

全国調査と比べても、信大生の価値観は全国平均と似たような特徴を表している。「科学の理論的な発展に貢献する」項目に関しては、全国平均より 14%上回っている（信大：47%、全国：33%）。

2014 年度 信州大学新任教職員研修【教員】(資料：矢部)

e-Learning の効用と利用の仕方

ー ICT 活用による教育の質保証を目指してー

NOTE:

1. 教育の質保証

求められる「教育の質」

- ・ 学士力
- ・ 社会人基礎力
- ・ グローバル人材

⇔ 主体的な学び

↓

「21 世紀市民の育成」

「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力をはぐくむ」

(中教審答申：2012 年 8 月 28 日)

⇒ どうする？

★授業において

★授業外では

2. ICT と教育の質保証

◎e-Learning, ICT の活用って何？

e-Learning = electronic-Learning

CAI (Computer-Aided Instruction)

CBT (Computer-Based Training)

WBT (Web-Based Training) などの発展から派生

ICT = Information and Communication Technology = 「情報通信技術」

e-Learning は, ICT を活用した教育 (学習) の一つ

◎ICT 活用教育の効率と効果

「教育の質保証」, 「主体的な学び」にどうつながる？

◎教育の質保証に向けた ICT 活用の授業デザイン例

★双方向性確保

授業への参加意識

★出席・成績管理

★LMS (Learning Management System) の教材配信, 小テスト等

Flipped Classroom と授業参加

★LMS と画像配信

3. ICT を活用してみよう！

◎何ができる？ (とりあえず使ってみよう)

⇒ 別紙資料参照

◎詳しくは, 「新任教員向け e-Learning 研修会」へ

日時: 月 日() ~

会場:

SUNS 配信を予定

平成 26 年 4 月 2 日

平成 26 年度新任教員 各位

e-Learning センター長 赤羽 貞幸
高等教育研究センター長 小池 健一

新任教員向け eALPS 研修会について（通知）

このたび、下記のとおり、新任教員向けに「eALPS 研修会」を開催いたします。本研修会は、これまで e-Learning センターが実施してまいりました信州大学全学教育基盤システム「eALPS」（授業支援 Web システム）の講習会等を、高等教育研究センターと共同で実施する FD と位置付け、新任教員向けに、教育における情報通信技術（ICT）の活用能力を高めていただく目的で実施するものです。

つきましては、ご多忙の折とは存じますが、是非ともご参加いただければ幸いに存じます。ご参加される方は、お手数ですが、**4 月 18 日（金）**までに下記担当（早水）までご連絡ください。

記

日 時： 平成 26 年 4 月 24 日（木）13 時 00 分～14 時 30 分

場 所： 松本キャンパス理学部 C 棟 2 F 大会議室（主会場）

※以下のとおり SUNS 配信を行います。

教育学部：SUNS 会議室 工学部：SUNS 会議室

繊維学部：SUNS 会議室 農学部：SUNS 会議室

内 容： eALPS の機能と活用事例を紹介し、実際に授業のコースにログインして体験していただきます。個別相談にも対応いたします。

※無線 LAN に接続可能なノートパソコンをご用意いただき、人事課より発行されている**業務用 ID**とパスワードを忘れずに控えてきてください。

講 師： 矢部 正之（高等教育研究センター・e-Learning センター）

東原 義訓（e-Learning センター）

谷塚 光典（e-Learning センター）

長谷川 理（e-Learning センター）

なお、本研修会の出席者には、「FD 参加証書」が交付されます。

本件事務連絡先

学務部学務課教務グループ 細川・平

電 話：0263-37-2194（内線）811-2277

e-mail：campus-fd@shinshu-u.ac.jp

e-Learning センター 早水

電 話：026-237-6126（内線）831-4247

e-mail：elearning@shinshu-u.ac.jp

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.017

2013.2

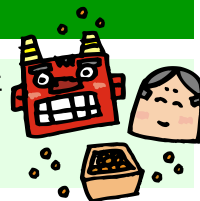
- 初年次教育を改めて考える
- FD活動報告
- スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

初年次教育を改めて考える

「初年次教育」という言葉を知らない大学関係者はおそらく皆無であろうと思われるほどに、この10年間に「初年次教育」は急速に普及しました。今一度、初年次教育とは何か、何を目的としているのか、そして初年次教育が真に力を発揮するのはどういう場面なのかを整理し、見直したいと思います。



初年次教育とは、高校から大学への円滑な移行を促すため、必要な諸経験を踏ませることであり、初年次を対象とした授業科目群を整備することではない。

初年次教育は、「高校（と他大学）からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」（川嶋2006, p.3）と定義されますが、「初年次教育」の元の英語は、First-Year EducationではなくFirst-Year Experienceであることに注意が必要です。初年次教育の意味するところは学生の「初年次の経験」であって、特にアメリカで実践されているのは、学問や学習面で大学に適応するために必要なことを大学側から学生に教えるというよりも、「教室内外で包括的・総合的に大学への移行を円滑に促すため、大学がそれを意図的に支援する」（川嶋2006, pp.4-5）というものです。

高校から大学への移行を体系的に促すために、アメリカの大学では、学生が高校を卒業した時点から大学への入学まで、そして2年次に無事進級するまでを連続的にとらえ、それぞれの段階で必要なプログラムを体系的に提供しています。このプログラムのなかで授業として提供されるものは、前期に開講される初年次セミナー1科目くらいです。オリエンテーションや寮生活など、その他のものはすべて授業外あるいは教室外で行われ、初年次セミナーや他の授業ベースの活動と関連付けられてデザインされています。したがって、たとえば外国語や教養科目を全体の何割教えれば初年次の移行が促される、といったことは全くないのです。

初年次教育のもっとも重要な実践は、高校と大学の断絶を、学生が自分自身の力で乗り越える応援をすることである。

アメリカの初年次教育が力を注ぐのは、高校と大学

の断絶を、学生が自分自身の力で乗り越えるための支援を効果的に提供することであり、高校と大学の学校段階に存在する断絶や困難を消してならし、学生がなだかな道を歩けるようにするものではありません。

「支援をする」ということは応援し励ますことであり、学生が受けるべき試練や関門は原則として存在します。アメリカでも大学入学時点での選別が機能しなくなっているため、以前は存在していた高校と大学の間にある障壁を越えずに、学生が大学にやってきます。障壁を越えていないならば、大学入学後にその障壁を越えさせることが求められますが（荒井, 2011）、それを初年次教育が提供するわけです。学生は学問的にも社会的にも精神的にも成長することを強いられますが、すべての面で適応するために、方向付けられ、練習し、成功をするまでの一連の「経験」を大学は用意します。学生は断絶に直面し戸惑いながらも、励まされると同時にシビアに評価される仕組みの中に置かれることで、実際に努力をし（「エンゲージメント」と呼ばれる）、その結果、初年次を乗り越えていきます。教員中心主義から学生中心主義へ、また、教授から学習へ、という一大発想転換は、学生に努力させることを貫く、この「独特の哲学とペダゴジー」（濱名, 2006, p.247）によって起こったものでありましょう。学生がやる気を出して奮起し、努力をする（エンゲージする）という「経験」を提供する仕組みは、それぞれの初年次プログラムの中に埋め込まれており、そのゴールは、初年次生がドロップアウトをせずに2年次に進級することに焦点化されているのです。

大学卒業後のドロップアウトと大学における「障壁」の効用



アメリカの大学では、GPAが一定の値を下回ると初年次終了時点で退学処分を受けます。初年次でのドロップアウト率を下げることは大きな課題で、リテンション（2年次への進級率）は80～85%前後が目標として設定されています。アメリカの大学において、初

年次の高い障壁がはっきりと学生に見えているわけですが、一方で、日本の大学における中退率はアメリカに比べて低く、学生が障壁を越えるという課題が学生にも我々教職員にとっても、喫緊の課題としては立ち上がってきません。しかし、日本においてアメリカの中退率と同様に扱うべきであるのが、大学卒業後の進路未決定者と短期離職者の割合です。濱名（2006）はいくつかの統計を組み合わせて、たとえば「社会科学分野や人文科学分野では卒業生の5割近くがフリーターのような不安定雇用やニートを経験する可能性がある」と推計しています。これに中退者を加えると、社会科学分野や人文科学分野に入学した学生の「6割以上が、大学入学の18歳から卒業後3年の25歳までの7年以内に『進路挫折』（キャリア選択で大幅な軌道修正や挫折）を経験する」（濱名、2006、pp.248-249）ことになるのです。

学生が越えるべき対象であった、「断絶」「壁」としての大学入試が多く大学の消滅した今、学生の多くは大学入学を決める際に人生の選択をしていません。そして選択の先送りの結果は、日本の場合、大学卒業後に顕在化することになり、社会全体がその代償を払うことになるのです。学力も意欲も欠ける学生を多く抱える大学の困難は大きくなるばかりですが、かといって高度な知識基盤社会では、進学しないという進路行動は、とりもなおさずその若者の人生にとってやはり不利に働きます。大学の教職員が、大学には学生が越えるべき「壁」があることをまずは前向きに受け入れ、毅然としてそれを学生に課し、愛情をもって

共に歩く必要があると思いますし、それが学生を一人前にするための教育であるように思います。

学生から努力を引き出す

アメリカの初年次教育を輸入する過程において、日本の学生研究は飛躍的に発展し、多くの成果が蓄積されました。これらの研究によって、アメリカの学生研究によって指摘され提案されていることは、基本的に日本の学生にも当てはまるということが明らかになってきました。それぞれのキャンパスに在籍している学生の構成やそこで実効力のある初年次教育のありかたが多様であるように、日本の高等教育の文脈もアメリカとは異なり、各大学の事情もそれぞれで多様ではありますが、原則は学生のエンゲージメント（＝努力）を引き出すこと（小方、2008）であり、アメリカも日本も共通しています。学生の努力を引き出す要因はいくつかありますが、最も重要なものの1つが、教員と学生の良好な関係です。そしてこれは、信州大学の強さとして誇れるものになると思います。

（文責：加藤善子）

引用文献：

- 荒井克弘（2011）『高大接続の日本的構造』『高等教育研究』第14集、pp.7-21。
小方直幸（2008）『学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム』『高等教育研究』第11集、pp.45-64。
濱名篤（2006）『日本における初年次教育の可能性と課題』濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向』丸善、pp.245-262。
川嶋太津夫（2006）『初年次教育の意味と意義』濱名篤・川嶋太津夫編『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向』丸善、pp.1-12。

活動報告 FD活動報告

12月に各部局で行われた多数のFD・SDにおいて、高等教育研究センターの教員が講師を務めました。開催報告は高等教育研究センターのウェブサイトでご覧いただけます。



▲12月21日医学部附属病院での看護師研修の様子



▲12月27日繊維学部でのFDの様子

開催日	部局名	テーマ	参加人数	講師
12月4日（火）	理学部	現代の学生をめぐる状況と、信大および理学部の学生の特徴-新入生調査(2011)のデータを中心に	33	加藤 善子 准教授
12月14日（金）	農学部	教育におけるICT活用に関するFD講習会（e-Learningセンターとの共催）	7	矢部 正之 教授 長谷川 理 助教※ （※e-Learningセンター）
12月18日（火）	全学教育機構	「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(中央教育審議会答申)について	41	加藤 鉦三 教授
12月18日（火）	医学部	医学部附属病院看護管理者研修	55	加藤 善子 准教授
12月21日（金）	附属病院	「看護管理者のリーダーシップを考える」	33	
12月27日（木）	繊維学部	「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(中央教育審議会答申)について	31	加藤 鉦三 教授

スタッフからひとこと

「出口」と言えば就職状況でした。今後はそれに加え、「この学科で勉強すると〇〇ができるようになる」という意味での出口が重視されます。しかし慌てる必要はありません。先生方が、ご自分が信じる授業の効果を日々口にだしていけば大丈夫です。

（教授 加藤鉦三）



高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter No.023

2013.10

- グローバル人材とは
- FD開催案内
- FD活動報告
- スタッフからひとこと

信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY



グローバル人材とは

最近とても気になる言葉があります。メディアで氾濫している「グローバル人材」という「流行語」。人・モノ・カネ・情報が国境を越えて行き交うこの新しい時代において、グローバルに対応できる人材の育成が求められるといえます。

しかし、普段何気なく使われている「グローバル人材」とは、いったいどんな人材を指しているのでしょうか。英語が話せ、欧米のビジネスルールを熟知する人がグローバル人材といえますか。あたかも自明のように語られているこの言葉ですが、その中身は必ずしも明らかにされてはいません。

誰がグローバル人材なのか？



いわゆる「グローバル人材」とは、およそ①グローバル社会でも活躍できる日本人に加え、②留学生を含む海外からの高度人材という2種類に大別できます。

育成すべき具体的なグローバル人材像に関して、もっとも広く用いられているのは、産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2012）が提示した人材像です。推進会議の審議まとめによると、「グローバル人材」の要素は、I. 語学力・コミュニケーション能力、II. 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、III. 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーという3つに集約できます。日本人向けの人材像と読み取れます。一方、外国人さえであれば、自然にグローバル人材の要素を備えているという認識も匂わせています。

なんというすばらしい人材像でしょう。しかし、語学力以外に、いずれも抽象的文言に止まっています。その原因なのか、「グローバル人材」は同じ文書の途中では忽然と「英語のできる」人材にすり替えられました。I～IIIの「資質・能力は単一の尺度では測り難い」ため、「測定が比較的に容易な」語学力を基軸にして、「他の要素等の「内実」もこれに伴うものを期待」するといえます。このように、教育現場で現在挙って取り組んでいるのは、外国語（英語）教育の充実となっています。

グローバル人材＝英語力？

英語教育の抜本的強化が高等教育の現場で着々と進められています。TOFEL成績を大学の受験や卒業の要件とする自民党教育再生会議の提案が見送られたものの、TOFELなどの外部試験を活用する大学が確実に増加しています。英語による授業も政策的に推進されています。2008年にまとめられた教育再生会議の最終報告書におい

て、英語による授業の大幅増加が直ちに実施に取りかかるべき大学改革の事項とされました。そこでは、大幅増加の目安として「当面30%を目指す」という目標が立てられました。留学生を引き付ける目的のほか、日本人の英語力の向上も期待できるという。かくして、日本人と留学生という2種類のグローバル人材の育成を促進するために、英語による授業の効果が高く期待されています。

しかし、英語による授業は果たしてグローバル人材の育成に効果があるのでしょうか。その先進校である国際教養大学等は、高校生からも企業からも人気が高いです。英語による授業の成功例とも言えますが、進学者の英語力がもともと高いということを考慮すれば、その養成方式はすべての大学に普及するのが困難でしょう。そして、日本の留学生の9割以上が非英語圏の東アジア出身であることに鑑み、同じく非英語国家の日本で英語による授業の効果も相当疑問です。残念ながら、日本の大学で英語による授業の効果を検証する研究は、現在まだ見当たりません。

両角（2013）が講義の英語化をいち早く進めた韓国の事例を検証して、英語の講義は英語を母国語とする学生にはレベルが低すぎ、そうでない学生には理解が難しいという中途半端な結果に終わるケースが多いと紹介しました。大学教育の国際化の背景が日本と似ている国の経験であるだけに、日本は慎重にグローバル化に対応した大学教育のあり方を模索していくことが重要でしょう。

中国では、国際通用性が高いとされる医学、工学、経済分野において、英語による授業が各大学の中で急速に普及しています。その効果はいかなるものでしょうか。上海交通大学は、学生の学習効果について、英語による授業を実施する機械工学実験クラスと従来の養成方式を行う伝統クラスとの比較を試みました。伝統クラスの学生は、厳しい選抜試験を経て選ばれた実験クラスの学生と比べ、1年生の時点では各種の能力が若干劣っていました。しかし、4年生の時点になると、すべての能力得点に関して、前者が後者を上回るという逆転が確認されました。中でも伝統クラスの学生は、自己学習能力と批判的思考能力が特に抜かれています。インターンシップと双方型の教育を実施した効果だろうと推測されています。逆に英語による授業は、教員、あるいは受講者の英語力の制限で、学生が講義内容を十分に理解できず、その後の専門教育全体の履修に影響してしまう可能性が指摘されました（楊頤・喻丹 2013）。

グローバル化人材の育成が、英語教育さえ取り入れれば実現できるものではなく、その他にも重要な能力の育成が必要であるということを見事に証明してみせました。

学生の学習効果を上げるには、どのような授業が有効な

のでしょうか。東京大学の「全国大学生調査」（2007年N=48,233）の結果によれば、学生の理解や興味を学習に結び付ける誘導型の授業や、学生の小論文へのコメントなどの参加・双方型の授業が大きな効果を持っているといえます（金子 2013）。これは、上海交通大学の研究結果と一致している内容です。



グローバル人材になるには？

それでは、英語よりも大事な能力とはなんでしょうか。筆者はグローバル人材育成推進会議が提起した「グローバル人材」のⅡとⅢの要素だと考えます。どこかで見たことがある内容ではないでしょうか。実は、小学生の学習指導要領、大学生に要求される「学士力」、さらに経産省が主張する「社会人基礎力」の中に、いずれもⅡとⅢの要素と似たような能力が強調されています。大学の共通教育がまさにこれらの能力の育成を主眼として実施されているものです。外国語（英語）教育があくまでも共通教育の一部であり、明確な評価基準が設定したいその他能力の育成をもっと重視する必要があるのではないのでしょうか。

一方、経団連の「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート調査」（2011年、n=584）では、企業は「外国語によるコミュニケーション能力」を備えた者が望ましいという意見を挙げたものの、大学者採用時にもっとも重視する能力は、「外国語能力」ではなく、「主体性」、「コミュニケーション能力」と「

実行力」などの「汎用的技能」、「社会人基礎力」であります。それなら、英語教育は虚像に過ぎないでしょうか。

「グローバル人材」＝「英語のできる人」と短絡的に考える人がきっと多くはないでしょう。しかし、評価重視の今日において、英語力・英語による授業は都合のよい評価尺度として用いられていることも事実でしょう。その評価はグローバル30、グローバル人材育成推進事業などのような大型競争的資金の獲得に直接繋がっています。結果としては、多くの大学が英語教育ばかりに目を奪われてしまいました。

かといって、英語は本当に大事ですね。これが来日11年のこの私が痛感したことです。

【参考文献】

Scott, P. (1998) The Globalization of Higher Education, The Society for Research into Higher Education & Open University Press, Published by SRHE and Open University Press, pp.123-124.

黄福涛 (2002) 「高等教育の国際化に関する研究の展開—比較的な視点—」『大学論集』広島大学高等教育研究開発センター、29-41頁。

両角亜希子 (2013) 「急激な“国際化”は何をもたらすか—韓国事例から—」『中央公論』2013年2月号、64-69頁。

金子元久 (2013) 『大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ』玉川大学出版部。

楊頤・喻丹 (2013) 「上海交通大学工程教育課程改革成效分析—基於學生學習效果評價的反馈—」第6回日中高等教育フォーラム発表資料。

(李 敏 LI Min)

お知らせ 青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズ 開催案内

*日 時：平成25年10月30日（水）16：20～17：50

*テーマ：第2回「学生がより学ぶために、私たちができる基本的な工夫」

*講師：金 早雪（経済学部教授） 加藤 善子（高等教育研究センター准教授）

*会場：【メイン会場】松本キャンパス旭会館3階大会議室

※教育学部・工学部・農学部・繊維学部のSUNS会議室に遠隔配信を行います。

第2回目の今回は、「学生がより学ぶために、私たちができる基本的な工夫」をテーマとして開催いたします。どうすれば学生がより積極的に学ぶようになるのかという課題は、なかなか解決しない難問ですが、学生を受け入れる大学が、また個々の授業で、効果が上がる具体的な取組や基本的な原則は存在します。今回は、その原則を解説した上で、それに則った実践を、経済学部の先生にご紹介していただきます。また、後半では参加していただく先生方から、効果を出している実践もご紹介いただきます。参加申込みの必要はございませんので当日はぜひご参加ください。

※ 続けて、第3回「大学生の動機づけを考える—教育心理学の観点から—」（11月12日（火）13：00～）、第4回「大学生の理解を考える—教育心理学の観点から—」（11月29日（金）14：40～）は教育学部島田教授を講師に迎え、開催いたしますので、そちらもぜひご参加ください。



活動報告 2013年度信州大学FDカンファレンスを開催しました

「2013年度信州大学FDカンファレンス」が9月10日（火）・11日（水）の1泊2日の日程で、筑北村の冠荘荘にて行われました。今年度は「学生が真に学ぶためのしかけとしくみ」というテーマで、学内10部局から、36名の参加がありました。

今年度は、講師として兵庫大学から吉原恵子先生をお迎えし、1日目には「大学生はどこで何を学んでいるのか—学習成果としての汎用的能力—」をテーマに全員参加の講義をしていただき、2日目には「ジェネリックスキルを個々の授業科目の達成目標に入れ込むには」というテーマでワークショップもしていただきました。また、高等教育研究センターおよびアドミッションセンターの教員が講師となり、「組織の目標、私たちの目標」、「GPAを活かす成績評価—シミュレーションから見る期待と課題—」、「信州大学の学生について」、「アサーション・トレーニング」、「アドミッション・ポリシー（AP）と教育の質の保証」をテーマに、FDを行いました。

どの分科会もグループワーク中心だったため、終了時のアンケートでは、「他学部の教員と意見交換ができてよかった」という感想が多く寄せられ、普段話すことのない他学部の教員との交流の場となる等、有意義なFDとなりました。



▲講師の吉原先生

「ヒッグス粒子の発見とノーベル賞」

10月8日に今年のノーベル物理学賞の発表があった。「ヒッグス粒子」の存在を提唱した二人が受賞した。この理論が発表されたのはほぼ半世紀前で、その存在を正式に報告した論文が出たのは、つい先日である。理論は実証されることで強い説得力を持つ。もちろん物理学以外の世界でも、…。(副センター長 矢部正之)



高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter No.025

2014.2

- モチベーションを高める年度計画の立て方とシラバスの書き方
- FD活動について
- スタッフから一言

信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY



モチベーションを高める年度計画の立て方とシラバスの書き方

強いチームとは



今、二つのチームがあったとしましょう。どちらのチームも、指導者やキャプテンの力量とチームメンバー個々の能力は同等だとしましょう。この二つのチームが試合をするとしたら、どういう要因が勝敗を決めるのでしょうか。作戦が当たる、外れる、ということと運を除けば、やはりそれは、いわゆる「モチベーション」ではないでしょうか。

チーム全体のモチベーションを高めるには、メンバーが共通の目標に向かって一丸となって努力するという状況にもっていくことが必要でしょう。おそらく最も簡単なやり方は、「次の試合に勝つ」とか、「上位リーグに昇格する」といった、とても分かりやすい、スローガンのような目標を定める、ということになります。こういう目標があれば、次のような効果が期待できるでしょう。

【目標の効果】

- ① チームに**求心力**が生じ、まとまりがよくなる
- ② チームの目標を達成するために、**チーム**がしなければならないことは何であるのかが明確になる
- ③ チームがしなければならないこと（＝②）をするために、**個人**が何をしなければならないのかを個人が考える
- ④ ③が高まれば②がさらに高まる、という、個と全体との相乗効果と好循環が生じる

しかし、もしこのような目標が、例えば「プロのチームに勝つ」というような、現実味が感じられず、なぜその必要があるのかがメンバーで共有できないものであったりすれば、そのような目標を掲げても、チームのモチベーションは上がらないでしょう。また「チームとメンバーが共に向上する」というような、抽象的で高尚なスローガンである場合、誰にも反対されない代わりに、誰もこれによって動くことはないでしょう。「次の試合に勝つ」でしたら、メンバーは誰でも強く共感できるでしょう。しかし「チームとメンバーが共に向上する」でしたら、「次の試合に勝つ」と同等の共感度は望むべくもありません。ただし、「チームとメンバーが共に向上する」と「次の試合に勝つ」という二つの目標間で明確な上下関係がある場合、すなわち、前者をより高い目標として、後者を、前者に近づくための当面の目標、というような位置づけがはっきりしている場合には、どちらも有効な目標となるでしょう。さらに、仮に目標が12個あったとしたら、その12個の目標によって上の①から④の効果を期待することはできるはずもありません。以上をまとめます。



【目標が効果を持つための条件】

- ⑤ 「確かにそれは必要だし、それをやるといいことがある」と、メンバーが**個人レベルで共感**できている
- ⑥ 抽象的で高尚な目標は、メタレベルのより高次の目標とすべきであり、モチベーションアップのためには、**具体的に明快なスローガン**でなければならない
- ⑦ 目標がスローガンとして機能するためには、**目標がたくさんあってはならない**

信大の中期計画と年度計画

上で、スポーツチームを強くするという点において、適切な目標を立てることが重要であること、また効果を持つ目標であるための条件がある、ということを見ました。さて、信州大学の状況はどうでしょうか？

【目標の効果】

- ① 目標による求心力はない
- ② 目標を達成するために大学全体でしなければならないことは何であるのかは、必ずしも明確ではない
- ③ 大学がしなければならないこと（＝②）をするために、個人が何をしなければならないのかを個人が考える、という習慣はない
- ④ ②も③も低調であるため、個と全体との相乗効果はない

まず①ですが、信大の教職員が、「こういう中期計画があるから」とか、「今年はこの年度計画だから」という理由で発奮する、ということは、少なくとも私の周りでは観察されません。さらに言うと、そもそも「今年の年度計画は」というようなことが脳裏に浮かぶのは、担当当事者でない限り、普通はないのではないのでしょうか。たとえば私は教学関係の中期計画・年度計画を部分的に担当していますが、自分の担当していない部分については、正直言ってどういう年度計画になっているのかを意識することは非常にまれです。そういうわけで、中期計画や年度計画は、多くの人にとって事実上「他人ごと」であろうと思われますので、①はまずないでしょう。

②については、例えば信州大学の中期計画のうちの最初のもは、「【01】学士課程を通じて「信州大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」に掲げられた「人類知の継承」を図り、「科学的・学問的思考」を修得するための教育課程を整備する。」というのですが、これを直接スローガンとして使うには、抽象度が高すぎます。中期計画ごとに、この年度は何をするかを定めた年度計画というものがあつた、この中期計画に対し平成25年度計画は「教育課程の整備の環境として学習成果の可視化を実現する仕組みの導入を決定する。」というものが立てられています。

この年度計画でもまだ抽象度が高すぎるため、やはりスローガンにはなりません。（後述のように、これを各レベルで適切に『言い換える』という作業をすれば、話は変わってきます。）

③と④は、①と②ができていないため、期待する方が無理です。なお、念のため特に強調しておきますが、こういう事態に至ったことについては、誰か特定の個人のせいと考えるべきではありませんし、私も誰かを糾弾しようというつもりは毛頭ありません。正直言って、この①から④がないことに対して、大学も個人も意識はなかったのではないのでしょうか。私が問題にしたいのは、①から④がなかったということについて、私たちがそれを不思議に思っていない、という点です。

問題の性質と対処の方向性



①から④、特に①の「求心力ある目標」を強く阻害している最大要因は、中期計画や年度計画があまりにもたくさんあることに加え、各中期計画に（数の上では）対応した「部局事業計画」があること、つまり、単純に数があまりにも多すぎることがあげられます。要するに、上の条件⑦「数がたくさんあってはならない」の対極に現状はあるわけです。しかしながら、中期計画は、文科省から「中期計画の素」が降りてきますので、一つか二つにする、というわけにはいきませんし、また個々の中期計画も、「スローガン」としては機能しないとしても、いずれも「チェック項目」としては必要なものばかりです。そのため、⑦に対する対処は、次のようなものが考えられます。

⑦への対処：中期計画のうちごくごく少数のものを「スローガン」として用い、残りは「チェック項目」と考える。

条件⑤「個人レベルで共感できるものでなければならぬ」と、条件⑥「明快で具体的にでなければならぬ」は、同時に処理できます。まず、現状ではどちらの条件も満たしていないと思われますが、それは個人レベルで私たちが中期計画・年度計画に関心を持っていないことから明らかでしょう。しかし、両方の条件を同時に満たすやり方はあります。

まず、リーダーがスローガンを決めます。具体的には、中期計画の一つを選び、その中期計画を実現すると大学にとってどういういいことがあるかを説きます。上で確認したように、中期計画自体は、性質上、抽象度が高いものです。しかし選ばれた中期計画が一つあり、それによりこういうものがもたらされる、という目的が明確でありかつ共感できているとしたら、各部局は、「この中期計画は、我々の部局の性質からすればこういう言い方になる」とい

う『中期計画の言い換え』をするのはそれほど難しくはないのではないのでしょうか。その際大事なことは、

⑤と⑥への対処：中期計画を部局で言い換えた『言い換え』バージョンは、もとの中期計画よりかなり抽象度が低く、部局の性質に合わせてかなり具体的にになっているものとする。

ということです。もちろん構成員が「うん、それは必要だし、やればこの部局にいいことがある」と共感できるものでなければなりません。その『言い換え』バージョンを、学科、講座というように、それぞれのニーズと性質に合わせてどんどん具体的にしていけます。最後には、「自分はこれについて何をやるべきなのか」を考えます。このような考え方で、ごくごく少数の中期計画を、大学全体というレベルから個人まで降ろしていく、ということができれば、⑤と⑥は解決してしまいます。その時にはもちろん⑦もすでに解決していますので、以上で「目標が効果を持つための条件」がすべて満たされることになります。条件⑤⑥⑦が満たされれば、効果①～④が期待できます。

ところで、当高等教育研究センターが、中期計画の立て方にまで提案するのは筋違いであり、やり過ぎでもありません。ですから、以上の部分は、提案ではなく、一つの考え方を紹介したもの、と解釈してくださいますようお願いいたします。しかしながら、この考え方は、実は当センターの職務範囲で非常に有効に働く、という事情がありますので、押して紹介させていただきます。と言いますのは…

実は改訂シラバスガイドラインの考え方はこれ



平成25年度、信大ではシラバスガイドラインが改訂されました。その改訂版での重要なコンセプトは、『学位授与の方針』を（一つ）選んで、それを「〇〇ができるようになる」という形でその授業の言葉で言い換える、というものでした。この下線部で言っていることは、上で述べた「もとの中期計画よりかなり抽象度が低く、部局の性質に合わせてかなり具体的にになっているものとする」と同じことを指しています。シラバスを書く、という文脈でこれを言い直すと、

対象とする『学位授与の方針』よりかなり抽象度が低く、この授業の性質に合わせてかなり具体的な目標の形で、受講生に具体的に明快なスローガンを提案する。

ということになります。個々の部局で①から④が実現し、個々の授業でも同じように①から④が実現する、ということになれば、信州大学はものすごく強い大学になり、卒業生も授業の数だけの手ごたえと達成感を持って卒業していくということを期待してもいいのではないのでしょうか。

（文責：加藤鉦三）

活動報告

シラバスガイドライン改訂に伴うFDを実施しました

平成25年11月に改訂が決定されたシラバスガイドラインに関するFDを、各部局に
お伺いする形で実施しました。講師は、高等教育研究センターの加藤鉦三教授及び加藤善子准教授が務めました。高等教育研究センターで、「DPを授業の目標にいかにつけ
るか」、「成績をいかにつけるかー授業および課題の評価体系をつくる」、「シラバス見直しの観点
とはーシラバスを実際に修正してみる」の3つのワークショップを用意し、2月までに全部で6部
局（教育学部、経済学部、医学部、工学部、農学部、全学教育機構）で実施し、合計で212名の
教員が参加しました。随時、各部局からのFDの依頼を受け付けております。FDの実施に関するお
問合せはcampus-fd@shinshu-u.ac.jpまでお願いします。



スタッフからひとこと

夢のステージ、J1へ。私は松本山雅FCを応援しています。共に戦う喜びを。[スポンサー企業風に]

（教授 加藤鉦三）



信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

高等教育研究センター

〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

TEL: 0263-37-2194 (担当: 学務部学務課教務グループ)

MAIL: campus-rche_info@shinshu-u.ac.jp